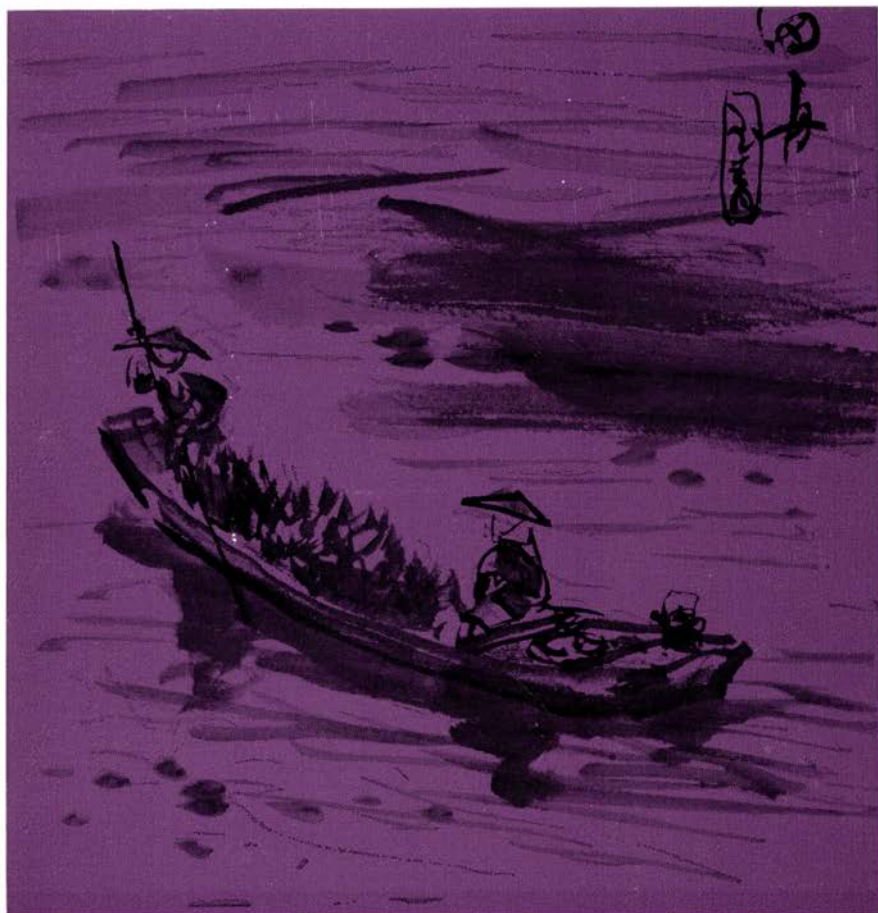


川柳塔

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
昭和四十九年四月二十五日 印刷
昭和四十九年五月一日発行 (毎月一日発行)
創刊大正十三年 通卷五六四号



No. 564

五月号

国立 奥新和歌浦
公園

・雑賀崎



国際観光旅館

うおまた
魚又楼

誇る 海岸 風
る 美 光
を 媚
な

TEL 和歌山 (44)0431・1186(代)
大阪案内所 (641) 3 5 6 4

あたたかいご家庭へ、あたたかいおみやげ!

豚 鰻
焼 売
焼餃子
又焼鰻

豚まんの王様、やき豚入り



大 阪・なんば



TEL (641) 0551-2



〈出張店〉 なんば高島屋／虹のまち鹿鳴／心斎橋そごう／梅田阪神／天満橋松坂屋
京阪デパート／堂島地下センター／中之島サン・ストア／なんば新川店／奈良近鉄百貨店

忙 と 閑

冬白く息をひそめる医者の門

底冷えにびしよ濡れのまま腹がへり

性こりもない装婆つけに夫婦もめ

腕組んだまま祖父は目で叱り

うそ寒く虫の知らせの夢が醒め

去る3月12日の新聞やテレビは小野田少尉の羽田着で日本中を湧かした。大歓迎の意味の内容にはいろいろとあろうと思うが、私は色つやのいい元気な彼の顔を見た瞬間、過去30年の彼の生活が何を物語るか、横井さんの時と同様極めて大きな関心をもつて眺めた。興味がある等というには余りに大きな問題である。健康保持とか、長寿のための方向とかを、どこに求めるか。環境衛生だ、栄養学だと日々やかましく頭を痛めている私達であ

る。トイレットパーが一日なくなると大騒ぎするかと思うと、ご馳走を食べすぎて苦しんで居る人もある。貧乏のために一家心中する家庭があるかと思うと、宝くじに当たって自殺する人もある。猛獣でも衣食に不自由ないとおとなしくなる。鶏は飛べない鳥になつて終う。一月号にも書いた通り「少し飢え少し冷やし困難なことに或る程度耐えさせることが健康体力づくりの秘訣」との益軒の教訓を思い出す。忙しいから句が出来ぬよりも閑な怠惰が獅子身中の虫である。

中 島 生 々 庵

川 柳 塔 5 月 号

座右の句

幸福は金庫の中になかりけり

私の句

子の出世肩身の広い親となり

(路郎)

築山快夢起

川柳塔五月号目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

忙と閑

中島生々庵 (1)

犬二題

正本水客 (2)

誹風柳多留廿五篇研究

(二)

(22)

クレージ巨匠展

清博美・八木敬一・紀内恒久・青木迷朗・西原亮
鈴木黄・室山三柳・入江勇・岡田甫

川柳塔(同人作品)

東野大八 (26)

水煙抄

中島生々庵選 (4)

一分間の柳論

川村好郎選 (30)

秀句鑑賞 (同人吟)

村上春巳 (39)

(水煙抄)

西川誓二 (59)

「旅人」以後の麻生路郎作品

(29)

宮口笛生 (63)

川柳中山道六十九次 (15)

菊沢小松園 (37)

若本多久志 (46)

富士野鞍馬 (47)

傍島静馬 (25)

犬二題

正本水客

初冬の一日、法華山一乗寺を訪ねようと玩具のような法華口の駅を後にした。バス道を外れて暫く、人家の疎になつた辺りから大きな一匹の犬が横に並んで歩き出した。速度を早めて百メートルほど行き過ぎたかと思うとクルリとこちらを向いて追いつくのを待っている。始めは少し気味がわるかったが道案内をして呉れる気かも知れないと、後になり先になりして3キロ余り、お寺の森が見えてきた。先ず一休みと、投げてやったパンを器用に空中で受け止めて、食堂の方へ急な石段を転げるように上つていった。境内を一巡して行くと、けたたましい犬の鳴き声が聞こえてきた。猫を見付けたらしく猛烈な勢いで森の奥の方へ駆けていった。ちよつと名残り惜しいような、ホッとしたような気持で石段を降りてゆくと、主人を迎えるように先ほどの犬がチャンと座っていた。それからまた奇妙な道行が始まった。少し時間があつたのでバス道へ出てからも歩くことにした。はげしく行ききかう車の流れに物怖じもせず、車道へ出てゆく犬の姿にハラハラしながら歩いた。

近作

生駒から

川柳塔の句風

麻生霞乃先生を月ヶ瀬梅林に囲む

福井野迷路ご夫妻：（金婚シリーズ）

NHK「この人と語ろう」

水客・潮花・小松園・阿茶・生々庵・一三夫

雅号ぶっちゃけばなし

初步教室

大萬川柳「私」

柳界展望

本社四月句会

各地柳壇（佳句地10選）

一路集「理容」

鳥

編集後記

諸家
高鷲亜鈍

麻生霞乃

本多柳志

直原七面山

有信新之助

不二田一三夫

築山快夢起

国弘半休門

本田恵二郎

川村好郎選

辻圭水

岩田美代選

岡崎祥月選

（一二夫・葉子）

（66）

（51）

（50）

（62）

（58）

（56）

（54）

（52）

（65）

（61）

（49）

座右の句

古くとも僕には仁義礼智信

私の句

槍となり楯ともなつて子を育て

（路郎）

藤井春日

紫香

国道で犬ひかれかけひかれかけ

どこまで従ってくる心算りやら、汽車まで

乗ってくるのと違うやらかと、そろそろ心配

になってきた頃、こちらの心を見透かすかの

ように駅の見える小道へふっと曲って見えな

くなってしまった。

立ち止れば立ちどまる冬の犬

留守番がないので暫く行けなかった妻と二

人の旅を思い立って、静岡の梅ヶ島温泉から

夕方帰宅すると、裏口に小犬が一匹チョコ

ンと座っていた、近寄るとちぎれるように尾を

振っている。近所の犬が紛れてきたんだらう

と余り氣にとめなかったが、翌朝裏口を開け

ると、どこからか一散に走ってきてキョトン

と顔を見ている。翌の日もその次の日も。お

となしくて可愛いので、あちこちから食べ物

を貰って住みついていた。そのうちに隣り

や裏の四、五軒と共同で飼おうということに

なっていた。立派な犬小屋がいつの間にか

出来上った。半年近くするうちに、すっかり

大きくなった。ある日、この犬お腹大きいの

と違うやらかという声を聞くと、先日、三日

ほど留守にして夜遅く帰ってくると、ワンワ

ンワンと鋭く吠えた。こいつ呆けてんのと違

うかと怒っていると、昨日赤チャンが産れた

んですよと妻が出てきた。まだ眼の開かない

小犬は六匹クウクウと鳴いている。母犬は散

歩に行っているらしい。

複数の飼主で犬おとなしい



中島生々庵選

大阪市 正本水客

ぼたん雪 石の素肌を抱き飽かず
まいちもんじに寄せる波から春の顔
自信のない足取りで冬が遠ざかる
手を振ってみな群衆の顔になる
さぬきうどん春菊の香に夜が深く

富田林市 岩田美代

なまじつか食える腕持つ悪女かも
利にさとい女となつてゐる紺の足袋
不意の計や形見となつた忘れ傘
土にとけ枯葉安らぐ彩となり
丹念に磨こう私も春にする

倉敷市 本田恵二朗

異常乾燥社会のころ枯れはてる
ムード派が三人揃ったぞサアたいへん
誰れかが笑った座が温うなった
あれが善人の声だよ筒抜ける

静かなる喜び末っ子に嫁ができ

宝塚市 傍島静馬

東風吹けど枯木に春は戻らない
老人ホーム新棟建増す花ざかり
反省の無口にあらず拗ねている
盥洗を下げてムードが盛りあがり
参道のいつもの場所にいる乞食

愛媛県 渡辺曉童

焼杉下駄も きつい郷愁
春が丸みを つける石ころ
かなしみの度が すぎて白ける
すぎたえものを くわえそこねる
きつい無沙汰に 木の芽筍

神戸市 小浜牧人

米の減る早さを俸せだと思ふ
履歴書に書けば一行埋めただけ
母親が味方で恋が許される

竹トンボ 竹も削れぬ子に育て
転がったままじゃが芋は芽を伸ばし

大阪市

宮尾 あいき

水仙が吐息している夜の部屋
たわむれの恋書き綴るむなしさよ

日曜と云う安らぎの風邪の床
友の手が風邪の額に心地良し
風邪の床夢の亡夫は上きげん

大阪市

小出 智子

古い恩一つ返して軽くなる

戸惑いへ夫の瞳温かし

届かない手紙を母に書き溜める

花道展どこか虚飾の臭いする

桃 桜 流儀に耐えし美しさ

堺市

高橋 千万子

マフラーも手袋もとり春の顔

よだれかけ真さら地ぞうも春の顔

夫婦げんかどころではない子の入試

人生に浪人という途中下車

女一人生きるソロバン見失う

大阪市

児島 与呂志

銀婚の貧苦に耐えた和の深さ

真実は一つに右だの左だの

耐えている看護する手の細い指

精一パイ生命力とはかく強し

意地捨てて話せばわかる老いの坂

岡山県

浜田 久米雄

わが道は寝床の中で決めて起き

値上げた豆腐半分はど残し

虎の子の一万円をそっと出し

もすこしのところでやめとくへを曲り

反抗のこころ銚子を追加する

大阪市

山川 阿茶

久しぶりの感冒

ビールスへ人間のもろさ腹が立ち

治ったら遺言書いとこ熱の床

かなしみと怒りの涙量ちがい

安楽死悟れば解決つきそうな

次々と死んで友だち若くなる

大阪市

西出 一栄

結婚 合格 出費多彩な春であり

春よ来いプランあれこれ立てて待つ

春に向ってゆっくり動いている天地

生きのびて今年も聞ける花便り

モナ・リザを真似たら奇妙な顔になり

大阪市

本多 柳志

年賀状そろそろ尻尾振りはじめ

カエルの子はカエルと子らもせつかず

向き合うてもうときめきもない自嘲

初誕生お世辞に三歩 歩かされ

見残した勝海舟へ風呂が沸き

松江市 中川晃男

自分だけは死なぬ若もの 山へゆく
たとえばの誘いにかと乗せられて
黙ってはるから承知したのやと思い
そうやそうやと意見もたんのがけしかけて
去に際の手にも何か握らせる

尼崎市 黒川紫香

暈の目ようやく春となる明かり
ひとりぼちお茶も沸かさず水にする
独り暮しの外灯とは見えず
下手くそな経を亡妻笑うてそう
朝もやが解け宇和島は城下町

倉敷市 水粉千翁

花婿へ虹を架けてる雛まつり
能面の冬のいのちを研ぎすまし
雪どけのささやく春は遠からず
一步退く意義前向きを崩さない
明るさは日傘斜めにしてこぼれ

青森市 工藤甲吉

ノーカーデー人間やつとここにあり
働かざる者カローリを減らされる
なるほどという悪徳の面がまえ
亡妻が渡って行くよ虹の橋
孫連れて男やもめは街へ出る

名被露目の招待状が届く春

高槻市 若柳潮花

一本の傘を夫婦で借りる雨
ひっそりと咲いて散る氣の肥後すみれ
大輪に咲くまで待てず嫁にゆき
来る来ない花占いは吉と出ず

内孫初誕生

鳥取市 河村日満

へんばんと部屋のみつきも嬉しかり

知事選挙戦に入る

億近き退職金で知事が辞め
まっすぐにあの世へ落ちていた寝汗
話合いがついてる私案だなおもい
五十回忌の施主をつとめる不倅せ

大阪市 吉田圭井堂

はいるなり冷戦だなと靴脱がず
ありふれた謝辞では済まぬ今日の試歩
万一を恐れて世継ぎ診せに行く
弥陀如来の階上はピンクの映画館
無けりや馬鹿貯めりや貯めたでいじめられ

東大阪市 久米奈良子

人遠し心にダイヤちりばめて
お目にかかるまい夢が消えるかも
桜満開 祈りの寺の昼静か
揺れ動く心のままに髪がぬけ

もう心決まって文を淨火する

西宮市 島居百酒

陽の当る人には温かい郷里ぐらであり
本家まだでんと構えて郷里ぐらがあり
雑踏へやすらぎ求めに来る若さ
すれ違ふ理屈どちらも自我があり
三十年絶えた戦友の計知る寒さ

岡山県 嘉数千代香

埋れ火を母は種火として護り
枕木となつて悔いなきおんな坂
善人の言葉こころの傷に触れ
底辺の叫びマイクを通らない
犯人を孫に仕立てて事が済み

大阪市 河野君子

息子が病に臥して

神の与えし試練母子に今下る
春の音凍結させて子が病めり
母と子の枕へ乳房冷えてくる
満足は仰臥の息子に操られ
愛の鞭逆手にとる程癒え初める

大阪市 大坂形水

痛ましい記事同業の老社長
ストに慣れ歩け歩けの御堂筋
ここのとこ喪服着て出ること続く
天気まんよい仏さんの七回忌

ナイロンの葉で もみのうなつたさくら餅

豊中市 橘高薫風

心経の無の字の多き金泥なり
まだ見ぬ恋 山葵の花を今日見たり
三日月はこわしと乙女恋したり
蛸のないたこ焼それも四月馬鹿
読む限り末法の世も面白し

堺市 河内天笑

夏山の両手に星を持ち帰り
大空で網引をする天の川
ピラミッドのてっぺんに星降り給う
おんなが哭くと星は南の空に消え
東北地方鯨漁のめやすにさ
れたというむつら星の輝き
むつら星鯨を誘い出す光

富田林市 板尾岳人

長男スキーにて骨折(三句)
戸隠の雪は白くて憎しとも
手術中二十一分檻の中

間に合えば山で鍛えた骨やろう
何処でも寝れる特技の山男
眼鏡かけたまま寝ている山男

竹原市 三宅不朽

野火のおどるは芽吹く大地の喊声か
伏差しの茶封筒ばかり人を恋う

母と子の信濃路しずかに地図をたたむ
歳月をいとおしむごと髪を梳き
私の貌を妻よ寝顔にも抱くか

敏子改め

八尾市 高橋 夕花

しんしんと雪の吐息のもれる夜
白椿心ゆるして雪にとけ
乱れ舞う雪に女の性悲し
満月の地蔵の胸に眠りたし
にこやかに謀叛の旗を振っている

大阪市 不二田 一三夫

男がいて女がいて花がない
狂乱にまき込まれ無口をきめこむ
足を痛めて
先きつぽの黄色い葱にぼくを見た

寄席

芸人に好き嫌があるNHK
トチったにそこが受けたでうまく乗り

下関市 国弘 半休門

心してまことの道へ歩調とる
祈れども神さま遠くから招く
物価高自給自足の種子を蒔く
ちり紙も倉庫で値上げ待たされた

豊中市

戸田 古方

ひとさまの喜びを喜びと思え出し

上手におこって解決にほど遠く
ええしやさかい旅に出て遭難し
鍋底の丸味いいようもなく綺麗い

香川県 三井 酔夢

小野田さん帰国(二句)

一枚の紙切れ母に子を戻し
三十年わたしは何を信じ生き
怒りんば鏡をみると声がする
この人の髓まで抱き老い近し

高槻市 福田 丁路

信仰を兼ねて湯の旅花の旅
名匠の精魂こめた変な壺
クレジットカードで飲んだ後始末

伊良湖岬にて

時雨する伊良湖岬の紅椿

名古屋 吉田 水車

春一番人を斜めに歩かする

置くところへ置けばめ雛もうれし気に

家根屋さん家根を見上げただけで去に

小野田元少尉ルバングより帰還

小野田さんその人にして挙手の礼

松原市 谷垣 史好

喧嘩ばかりしても性が合いまんね
合理化が生んだしなびた蜜柑です

メニユーから素うどんが消え値上げされ

耳鳴りは腦の小人のお喋りか

八尾市 高杉鬼遊

小野田元少尉還る

一億の一粒となる背広着る

寂しさのとなり合せて生きている

ぼうふらが狭い世間を駆けまわり

まぼろしの美人の首は細かりき

米子市 八木千代

泣き顔を拭くまでチャーム待たされる

嫁と対話 女の業にふと触れる

夫婦より長い歴史の友も逝き

人絶えて川の私語きく橋となる

米子市 林瑞枝

水の冷たさふと雪国の老母を恋い

お姑さんへお電話頼むと娘の電話

空気で美味い屋敷の茶に招ばれ

嬉しい事聞かせ八十路の父に酌む

倉敷市 小野克枝

微笑みでかくせば痛みなお疼く

いたわりのひと言に泣く日が貧し

片足を悲劇の渦がはなさない

無抵抗主義ピエロは泣かぬことにする

八尾市 香川酔々

春一番名づけて人は春を待ち

王様の気分で春の苗木植え

雲海が登った汗を忘れさせ

モナリザを壁からはずす天の邪鬼

松江市 岡崎祥月

春そこに来ていて春のかくれんぼ

どん底をあえいだ日々を振り返る

老後のオアシス神が与えしか

城 空へ白一色の景を投げ

泉佐野市 阿万万的

第五回日展を見て

緑はみ出しそうに牧場の春を描く

ふんだんに赤 スペインの踊りの絵

春へ背伸びするカラマツの芽が赤く

山肌に沿うジグザクの生きる道

和歌山市 野村太茂津

鈍行は良し無人駅から春を乗せ

同じ下手なら後継ぎを育てんか

こけしにはなりたくはなし棚を拭く

よみがえる武士の花道掃き清め

倉敷市 野田素身郎

日が沈む今日も無策のまま暮れる

春雨にあわれや雨が滲みる靴

反抗期だんだん理論的になる

エレベーターおなじ柄と乗り合せ

平田市 久家代仕男

耕耘機若妻のせて音も春

春霞むかしは聞けた揚雲雀

備蓄あわれ味噌つぼの味噌減るに似て
貧富の差やっぱり下駄の片ちびり

倉敷市

藤井春日

とぼけてる心の底に刺があり

不合格はじめて自分の価値を知る

掟あり男の帰る道は無い

娘の不縁臍に傷もつ父詫びる

泉大津市

村上春巳

関東煮こんにやく小さく売れのこり

一億がなんとか島にすがりつき

コツコツと女のきざな歩きよう

友達と言う名で老いの坂をうめ

神戸市

仲 どんたく

渋柿の命踏みにじられて消え

紙ぎれとなつてくれるな貯金帳

踏み台のようなヒールでさつそうと

陰を選ぶ二人へ街が狭ま過ぎて

大阪市

福井 野迷路

訓練の積りの犬に護衛され

早口の相手で喧嘩ピンボケす

拝啓を消して考えてやめにする

牙のない虎だよ金のない実力者

倉敷市

小幡里風

落された穴で苦肉の策を練る

飢凌ぐ鎖を断つて飢えている

結末は一つ拇印を押しただけ

倅は花と対話に明け暮れる

倉吉市

奥谷弘朗

ぶちまけた話どっちも雲が晴れ

集金へ春闘の意義を聞いて見る

もめ抜いて出た結論が物足らず

わが道を行くにはあんまり貧しすぎ

大阪市

江城修史

交友三十六年友逝く(二句)

さようなら視野いっぱいに駆け行く

人生の余白へ残り火を消さず

小走りのくせもつ男の人生譜

煮つめたる嘔吐き隙のない男

下関市

石川 侃流洞

惜しまれた過去の話へ酌きこぼし

焼酎にも特級がある酔心地

縁遠い品が値下げになるニュース

安楽に死にたい母のお念仏

今治市

越智 一水

追っかけてこいと女のひとり旅

未完成なる詩を水に書いてみる

思想ゼロだからどたん場で消える

おだやかな光へ赤い芽黄い芽

島根県

藤井 明朗

勇気の暴走 学生罪を犯す
青春の謳歌へ猫も朝かえり
冬雲を押しあげ街は春を呼ぶ
すみれ咲く春へ重苦しい世相

藤井寺市

西

いわを

一ミリに足りぬ虫さえ歩を刻む
川岸へ河童ふらふら月を賞で
コーヒーの野だて楽しむ文化人
両隣り分けおうている花の苗

松江市

小林

孤呂二

ミクロンの誤差へ妥協のできぬ職
切り詰める話は妻とふたりだけ
風よ心して吹け進学の子がいるぞ
合理的だから若い人が好き

桜井市

岩本 雀踊子

山彦に嘘を作らぬ山男

片道切符で罪をすてに行く
故郷に残った友が家をたて
明日咲く花が雨にたたかれる

富田林市

木村 弥栄子

スミ吐いてイカ透き通るまで干され
出直す気洗い下しのタビを履く
ファイトなし自分へ弔旗かかげてる
各駅に炎えて人待つ彼岸花

米子市

石垣 花子

又一人戸籍はなして淋しがり
家事の手をあちこち抜いて共稼ぎ
いたわりも口に出だした夫の老い
履歴には書かない小さな秘密持ち

伊丹市

小川 静観堂

テレビ体操若さの限り曲げ伸し
へび山のバナナ三十年もう飽いた
風花を翹に薫じて親鸞
妻亡くしてより鯛の煮凝り口にせず

大阪市

金井 文秋

造花ではないんですなと触れてみる
役付いて一つ覚えのかくし芸
おもちゃとも云えぬ値段を孫に買い
甘えてる方が得だと孫の知恵

大阪市

神谷 凡九郎

さりげなく話され同調さされてた
人間の無知フエルターはまってた眼
何考えてはるのと聞かれ慌てたり
枝みんな切って小さく生きようか

島根県

堀江 正朗

音のまま動けばせっかち者にされ
守り袋についてゆきたし子に送る
値に触れぬ妻にすまない箸をとり
確かめてその詫しさが身を攻める

島根県

堀江 芳子

米を磨ぐみんな揃った音たてて
祈ることばかり生きがいかもしれず
歩かれる距離侮らず踏みしめて
賢妻でなくて炊事も歌になり

倉敷市 松下梁水

敗けて来た拳で拓く新天地
本心を探られていた変化球
噛み合わせ合詞 喜劇になって幕
筋道を通す本当の恐い敵

兵庫県 大江秋月

国鉄の停年を迎えて
停年の味かみしめる雪の朝

第二の人生へ再出発

温室を出て知る世間の寒い風
三日月と妻が見送ってる夜勤
農協の団体大きな声で降り

大阪市 川口弘生

合格をしてからおまもりのぞいてみ
耳鼻科医の春は鼻血の患者から

句友吉野志津さんの死(49・2・23)

二ん月は志津さん会費の要らぬ句座
天寿などかりそめの身の借衣裳

竹原市 小島蘭幸

旅たのしどこの訛りか連れになり
景色見下ろして朝の湯朝の酒

トップの座守る苦しさ口にせず
愛されている予感が怖いなと思う

岡山県 横山一声

町の寺ビルの谷間に沈みかけ
春の庭こんなところから芽がのぞき
正月の月から喪服のいる報せ
六十に趣味多過ぎて気がつかれ

松原市 玉置重人

ひっそりと春呼ぶ色の落ち椿
マンネリにデスクの配置変えて見る
幸せの余韻かワイン揺れている

初めての孫

血の恐さ娘と同じ孫の顔

大阪市 中川滋雀

永年表彰二句

居心地が良かっただけの年を食み
表彰状以下同文にもある拍手
妹の縁談へ姉の顔も読み
人生はショーかもドラム叩く夢

東大阪市 宮西弥生

二月九日 母 逝去

ずたずたに生き残りし日の孤独
母の夢ある日追うても追いつけず
詩のない雪の中を何故急ぐ
花の季を待たずに消える母あわれ

鳥取市 両川 洋々

つかの間の喜びだった誤報聞く
灯を消して母娘で亡父をまだ語り

砂丘にて

風紋を繕う砂丘の鼓動聞く
鳥取の春と対話をする素足

守口市 羽原 静歩

ボンコツの脳細胞を見透かされ
雞が千羽コツコツ春を産み

眼鏡越し借用証は達筆に

セールスも酒も後輩群を抜き

大阪市 河股 緑水

病む夫の見ゆるところに毛糸編む

これからが長いひとりの灯をともし

呼び止めて子の手に持たす金包み

よく出来た嫁を拾うたように言い

小松市 馬場 魚山

年輪を深くきざんで施設に寝

雪積る音ききとっている孤独

うどん屋が昼をとどける嫁の留守

水ぐすり小児をだます味をつけ

大田市 藤田 軒太楼

甘いとは思えど子のため為替組む

赤信号らしい噂さを耳にする

恐妻も酔が廻れば愚妻なり

光頭の伊達には年をとっていず

岡山市 川端 柳子

いたわりは誰はばかりず老夫婦
学ぶもの路傍の石の一つにも

お百度を愚ばかりと思えまい

青春讃歌卅年振り泣き笑い

竹原市 森井 菁居

わくら葉の悟りは風に身を任せ
ためらいを貌に出したら俺の負け

反戦の詩集に形容など要らず

優良運転手表彰(十年)

積木つみつけ榮譽へ掌が届き

大阪市 福井 多蘭子

かび餅が転げ出てきて昼とする
花嫁のように気取って七五三

野地蔵のお手に供えた五円玉

確定申告地獄の門を出てかえる

出雲市 板垣 草丘

草焼きの煙なつかし亡父が停ち

出雲市の医大

医大敷地降参したか旗がたち

五月十二日緑之助句碑一年句会

句は千年碑は万年の一年目

句碑を見て拜んで来たと云う便り

宿毛市 山本 窓花

口実になる午後からの雨となり
ひま人が出て来て憎まれ口もきき

我が裸像鏡に写す風呂上り

点滴の流れスムーズになる安堵

宿毛市 瀬田美知

孔雀の不満大空かける羽がない

亡夫の愛人私より先に逝き

三月絢爛花が咲き雪が舞い

生涯を駄馬で終るを恥とせず

大和郡山市 森田カズエ

常連の患者が来ない日の不安

針よりも細い血管もつ女

御予算のほうはと身なりちらとみる

スト反対中の一票私です

門真市 福島鉄児

浮気一つせぬ人生とは淋し

酌ぐ方に廻りジュースを飲んでいる

酒やめて飯のテンポが早うなり

岡山県 直原七面山

海鳴りを遠くに聞いて抱く二人

偽りの言葉も恋に彩をそえ

眉細く細く描いて夜の蝶

青森県 木村涼人

豪雪禍こんどは山崩注意報

国税のかからぬ店で生きのびる

小野田氏に脱帽我れも元兵士

大阪市 天正千梢

大切な物捨てて人生を空費

七光の裏打ちじゃまになり

新鮮な視角マイナスを意識して

呉市 林野甦光

理屈では通らぬ白い手が汚れ

地鎮祭地震があつて中止する

減量へさしずつめデイトひかえとく

姫路市 梅谿庵不醉

無理言うな物価を下げよ賃上げよ

惚れられる位の男を持てと強気なり

お年玉中に太子がおわしまし

松江市 舟木与根一

何はなくとも梅ふくらむ南向き

黙殺と決めて編棒動くなり

ウーマンリブ美人薄命見当らず

広島県 高橋鬼焼

歟のさび農夫に長い冬である

二日酔い財布の軽い朝を出る

着ぶくれた女におそい春の詩

倉敷市 竹内翁童

引きぎわをきれいにいずれば枯れてゆく

結局は我が身大事の拍手をし

途切れてからがうれしい見舞客

松江市 恒松町紅

同棲をしたとは大社さん知らず

俸せな道です妻がついて来る

変れども昔のままに曲る道

広島市 山田季賛

親の意見捨てて街でする苦勞

任かされた仕事個性が承知せず

裏話聞かされてからイヤになり

兵庫県 遠山可住

包帯を尋ねてくれぬのも淋し

ハラハラしていても父の座に父で居る

しばられたレモンのような定年か

宇部市 平田実男

本心を言いそうだから飲めぬ酒

長男小卒に思う

卒業のお祝い相撲を取ってやり

小野田さん帰国

我が辞書に任務遂行よみがえり

東大阪市 竹中肖二

出稼ぎの夢は故郷に雪が積む

雑兵に責を負わせて暮にする

天折をすれば天分惜しまれる

東大阪市 竹中綾女

心筋梗塞で天理教会会長逝く

千人を越える葬列静かなる

空費する時間が惜しい友が来る

お互に見栄捨てさせた物価高

岡山県 出原敬一

路のとう冬のくずれた匂いする

火と水の夫婦だまって扶け合い

惨敗の男一筆妻へいれ

奈良市 宮口笛生

生活の詩に物価高憎む

吊橋がゆらゆら谷の音ゆれる

石仏のまるさをまるくする歴史

出雲市 原独仙

花に蝶ワルツの型に戯れる

逢いたさに堪える深夜の霜きびし

耐乏へあなたの晩酌だけは別

岡山県 池田古心

持て余す暇が一刀彫に凝り

言うだけは言ったで一ふく火をつける

纏った話へ妻君出て縫れ

京都市 都倉求芽

躍り出る春よハッサクを剝くしぶき

早い目に出た日はバスが遅れて来

辞書を引く手つきも馴れてきた中2

鳥取県 清水一保

惜しい人だったと支持と票は別

散ったとて又咲く春ありじつと耐え

根生で性抜きたくまし寒雀

大阪市 河井庸佑

若葉萌ゆ山歩きして若返り

ライバルもいっしょにされていた左遷

左遷とは見えぬホームのにぎやかさ

松江市 柳楽鶴丸

川柳の目で万葉集を読む

無神論者も今日は靖国へ手を合せ

一番風呂満足そうな笑顔浮き

西宮市 藤村メ女

子には子のプライドがある反抗期

マンションに住む倅せを誇張する

寡婦の城守り通して詩に生き

愛媛県 村土旭童

筆不精電話も余りしゃべらない

寒いのに氷を見ろとおこされる

子もあてにせぬ土地乍ら僕の土

鳥取県 森田布堂

雪乗せて濠に伸びてる城の松

塔の影日時計として昼を食い

弔辞代読泣かせどころに節をつけ

笠岡市 松本忠三

賃上げが物価下げろという魔術

その先は言うなと酒の友なだめ

ブルドーザー先祖の田畠踏みにじり

精一杯させて貰った両親の墓

安らかに眠り給えと分家墓

初風呂があふれ倅せ囁みしめる

大阪市 室谷徹舟

職安で元の課長と顔が合い

おだてにも乗る会長で栄えてる

云い足らぬところは勝ち気の妻が埋め

岸和田市 葛城伊三郎

綿菓子を持った親子へ気が安み

割箸をちよっと上品すぎる客

千人は越えていようか読経の厚み

尼崎市 高津徹也

写真屋が花嫁料理盛りつける

飲んでいいと言う医者まで変えてみる

肩ぐるま雲の形も童話めき

鳥取県 鈴木村飄子

孫の肩もって孫と共にすね

死にたいと云う病人を眼で叱り

掌を合す心へつけ込む隙がない

東大阪市 落合思月

磨かずして珠の悪さを云う愚か

繁盛する店まで削る都市計画

嫁ぐ娘の荷拵え

親馬鹿がまた増やしていく娘の荷物

生駒市 草深 醉 升

明日がある店ですべてがゆきとどき
損徳にこだわり過ぎて不倖せ

小野田少尉帰還に寄せて

蔭膳の老母の祈り実をむすび

枚方市 宮川 珠 笑

精一杯生きた供花の奥の顔
揉めるだけ揉ませ与党の案で決め

参詣は幹事に任せバスで飲み

大阪市 黒田 真 砂

中年を過ぎてても赤を選ぶ春
春近したまの着物の衣ずれに

叔母の死

或る日ふと大樹が折れた如く逝き

美祿市 安平次 弘 道

模造でも喜ぶ妻で裏切れず
法よりも力 ダンプに割り込まれ

がっちりとか計握って妻太る

新宮市 大矢 十 郎

父叱る人が子供の目に不思議
光陰を教えて花は咲いて散り
立筒の写真大正の目に痛い

大阪市 飛田 好 一

雪害の記事の隣りの花便り
美しい月に夜道をはげまされ
湯の街へ高価な垢を捨ててくる

大東市 土岐 トク子

喜びを秘めて安堵の色も濃し

小野田元少尉帰還

失った祖国へ戻った拳手の礼
亡き夫の想い出よぎる戦闘帽

八尾市 大 路 美 幸

腕組んで寝る浮浪児へ花が散り

買い占めの記事で浮浪児涙をかむ

浮浪児の外遊土産は伸びた髭

柏原市 大 峠 可 動

心機一転炎に還る酒である

実現は遠く柳の如くゆれ

石神梅林にて

梅の香の自由短かし雨が降る

倉吉市 渡 辺 菩 句

病んでから詩の枯れぬ日々にある

山いまだ春の夢みて眠りおり

胃の痛み取れると妻に使われる

東京都 増 田 次 章

教育ママ信じぬ学歴無用論

音楽会所詮わが子の自慢会
せい一杯の奢りのあとの寂しさ

三重県 川上大輪

無縁仏墓傾いてそのまんま

隙のない女で噂の外にいる

ふり向けば出発点がそこにある

氷見市 関美子

形式の握手へ指が冷えていく

鳩のよに胸で若さは押して行く

朝市でまだ憶病なエビのひげ

倉敷市 能登原白水

谷底に咲いて明日に甘んじる

花散ってお礼心の施肥をする

税務署の眼鏡は抜け道ばかり見え

榎原市 岩井本蔭棒

ふるさとが恋しかろうに宮田輝

掻き分けて荷物で座席とる簇け

感情をむき出しにした音で締め

今治市 原田一風

何も手につかず炬燵に舞い戻り

梅干が粥のおかわりさせて呉れ

銭湯が空いて居て良し春の雨

呉市 榎田英詩

飛行雲桜吹雪は気が付かず

厭な人だけど長所はほめてあげ

伝説はハピーエンドにしてくれず

諫早市 原田明春

家計簿を釘づけにした物価高

遊ばせてもらうに高い保育料

虎のような初声嫁ごでかしたぞ

米子市 増田竹馬

猫に鈴つける役目を買って出る

共稼ぎスイッチ早い方が入れ

ウインドウ猫背の僕を見て通り

島根県 小砂白汀

過去みんな捨ててきれいなさくら貝

風あててミイラの夢を破るのか

空ら振りとなった揉み手のおきどころ

竹原市 時広一路

心よい目覚めへ今日は迷わない

閉ざされた心へノックまだ続く

秒針を走らせゆっくり針動く

羽曳野市 塩満敏

危険物もち込まないで新世帯

浦島が販ってみれば過疎の村

のぞきこめばマニキュアの宣伝中

鳥取県 川崎 秋女

母と娘の会話入り込む隙がない
六十にやあ六十のよき見付け出し

これでいいのか或る夜の私に問うてみる

松山市 谷 のぶお

投げ入れの一輪がよし事務机
のんびりと聞く鉛玉が口にあり
今ここに一期一会の日向かな

大阪市 柳原 静香

父母の忌を重ね輪廻の白髪染
三月三日女雛にまさる子が生まれ
春を待つ心の隅に旅の夢

大阪市 津守 柳信

俟約を知らぬ人種の物価論
手不足へ小言控えるくせがつき
さき行きの不安にやせる母子家庭

岡山市 永宗 宗義

若者は町へ帰った種を蒔く
老人の腕に逆らう耕耘機
着ぶくれたまんまで笥掘り出され

倉敷市 稲田 豊作

嫁優しうて長寿が欲しと思う日よ
抜け駆けをした日の心むなしくて

説得に行くと寝巻の若夫婦

鳥根県 錦織 文子

安らぎを編んで火鉢へ夫を待ち
残り火を集めて燃える灯を探がす
試歩の杖土と対話の今日の倅

貝塚市 行天 千代

人妻のいつでも燃える種火有り
顔パスが通用しない御代となり
空手形妻は蒸発四面楚歌

兵庫県 河原 みのる

実印よお前は何ンでも知ってるなア
手間どってみせても釣銭待っている

大阪市 今西 章雅

公害が遠出で高い釣りにする
延べ棒が有ればと思う金相場

東大阪市 斎藤 三十四

御百度の御利益信じ霜を踏む
石焼芋ライトバンで匂って来

堺市 藤井 一二三

親戚の藤井美代子さん結婚(二句)
祝われて待たれて今日の梅の花
荒れた掌へ易者は夢を載せてやり

堺市 伏見 茂美

合格にライバル同士抱きあい
すかたんと背中合わせの日が暮れる

大阪市 藤田 頂留子

お水取すむまではと春律儀
早買いを悔やますバーゲンビラつづく

富田林市 浅川 八郎

斗病の甘え頑固と人の言う
空っぱの頭で何うにも術はなく

島根県 榊原 秀子

かけ替えた衿の白さが匂う朝
そろそろに煮豆の堅き氣にかかり

茨木市 吉川 米子

少年のままの目もとで軍刀ささげ
ゴキブリはついでに掃除させてくれ

大阪市 鈴木 生仏

俄雨ぬれごちよし露天風呂
運のよいときには雨もよけて降り

若本 多久志

石仏の旅小遣いのいらぬ旅

孫一句

じいちゃんの皺はなぜかと思議がり
長髪の駅員制帽が漫画めき

鉛筆をなめても下五まとまらず
お倅せにと女の言葉うつるなる

看護学院卒業式(三句)

春や春夢は大きいほどがよし

サインしてくれと高看護学院出

カセットテープ式辞のリハーサルもする

蝶よ花よと育って手術三遍目

土地成金の豪邸の花見宴

北川 春巢

川村 好郎

云いたいこというて心に責められる

黄昏へまだ夕焼けが見たい欲

一戸建ち探し人情疎く住み

お歳ですからお大事にとは寂し

半分はやれやれ未亡人太り出し

西尾 栞

かくし子のさだめ咄咽のまま眠り

かくし子の無事大学を出た安堵

かくし子のきけばきく程似てる性

かくし子の晴の姿を見る写真

かくし子と会う夜すきやきにする

菊沢 小松園

花ぐもり離婚話が煮えつまり

花の下追って詮なき過去一つ

花吹雪後ろ姿の君なりし

いらだった手から遁れたシャボン玉

何人の男を食った口紅か

俳風柳多留廿五篇研究

一(二)一



八木敬一
(医師)

〒106 東京都港区東麻布1-18-12

八木敬一・鈴木黄・紀内恒久
室山三柳・青木迷朗・入江勇
西原亮・清博美・岡田甫

19 大一坐正風躰がもてるなり

八木「正風躰」は、俳句の正しい流風、蕉風の体をいうことが多い。また、「大一坐」とは、いうまでもなく多勢で吉原等に登楼すること。川柳では葬式帰りの句が多い。大一坐で吉原に遊びに行ったときには、蕉風の俳諧をかじって、表徳を持っているような連中がもてるのである。

表徳をにわかに土手て付けて遣り

拾六・17
六・28

恋無常などとおとける大一座

紀内「礎稿」のようなことは思うが、「正風躰」の解釈がもう一つしっくりこない。

青木「礎賛」。主題句は、生真面目なのが好かれるということ、表徳には関係ないから。

西原「青木説に賛。正風とは「変風」に対する語で、和歌・連歌にも用いる。依って、蕉

風とは元来同一ではない。
室山一同、青木説に賛。

入江一同。おとなしい奴がもてる。洒落のめすやつはふられる。

清「半可通より生真面目な方がもてる。洒落本『遊子方言』の息子がその例である。

岡田一同。

20 免許まで持てゝ嫁ハねかしもの

八木「琴の免許まで持っていないが、嫁はめったに琴を弾くことがない。せつかくの技量をねかして置くようなことももつたない。

琴という字は句の表面にないが、川柳では嫁「琴は約束のような形になっている、居なじむと嫁たん／＼にげいしやなり。

嫁の琴ちかしい客へ馳走にし
紀内「賛。「ねかしもの」は琴の暗示である。

青木「嫁の免許といえは琴であらう。
手を鬼のやうにして嫁隠し芸

安四・松4
二・33
一七・20

指三本やつの事で嫁ねじり
西原「賛。女の遊芸なら何でもよいであらう。まだこの句は、狂句臭はないと思う。

室山「礎稿、青木・紀内説に賛。

岡田一同。

21 咲と手のたらぬ太右衛門が中十日

八木「太右衛門」は、湯島の牡丹屋太右衛門。「中十日」は、四月の中十日近く、日の長い頃という意味と、牡丹の盛りの二十日間の中の真中の十日、という意味とを兼ねるのであらう。

牡丹屋太右衛門方では、牡丹の真盛りの十日間ほどは、ちょうどその頃は四月の中十日といわれる位、一番日の長い季節なのだが、全く忙しくて手が足りなくなる。

岡田一同。

22 塩竈の烟たへ／＼十二年

八木―前九年の役と後三年の役とを合せて十二年。この長い戦役で、奥州は大いに乱れ、人手もなくなくなり、塩釜地方の塩釜でも煙が絶え絶えであったであろう。

十二支が出切り奥州御凱陣
青木一賛。 三七・一七

柚と桃なるほどかゝる軍なり 五九・一五

(桃栗三年柿八年、柚は九年で花盛り、梅はすいとて十三年)

西原一賛。「塩釜」は現在の塩釜市の海辺の古名で、松島と海続きで名高い八歌枕Vである。小生、昨年六月に行つて来たが、現在の海はドス黒く、塩どころではないようだ。

室山―前九年、後三年の役賛。

岡田一賛。

23 花さかり伊兵衛も一首よんで寐る

八木―「植木屋伊兵衛といふ者、つゝじ・きり島を多く作る」(『江戸砂子』)とあるように、伊兵衛は当時の有名な植木屋。

また、柿本人麿の歌といわれる、「ほのぼのと明石の浦の朝霧に島がくれ行く舟をしぞ思ふ」の上の句を、床につく前に三度繰返して唱えたと、翌朝希望通りの時刻に目がさめるという呪がかった。

伊兵衛の所におそらくは貴人であろう、御遊覧があるというので、朝寐ぼう防止のために、彼も「ほのぼのと明石の浦の」と三度繰返して、寐たであろうとの句。

去ながら天気次第と伊兵衛よみ

傍二・23

西原一賛。「川柳江戸砂子」上頁八一の解は、「右の句の如く、腰折れ位は詠んだであらう」とあるが、これは卯木先生のミス。八木氏御明解。

室山―同。「貴人の御遊覧」はともかく、花は早朝に開くものである。

清―「一首よんで寐る」の語から、朝起きのための、人丸の歌と解すべきであろう。

岡田―同。

24 くつを冠に蔵人ハ口こたへ

八木―和歌の一体で、折句を更に複雑にし、ある語句を歌の毎句の首と尾に一音ずつよみ込むものを「沓冠」という。

「蔵人」は、本句の場合は「物かはの蔵人」をいう。小侍従の「待宵に更け行く鐘の声聞けば、あかぬ別れの鳥は物かは」に対して「物かはと君がいひけん鳥の音の今朝しむいかに恋しかるらめ」という歌を詠んだ故事による蔵人のあだ名。

句意は、侍従の「待宵に」の歌に対し、物かはの蔵人は「物かは」という歌で、沓冠の技法により応えた。まるで口答えをしたようであるというのである。

しり取りで蔵人一首やりこめる

きれいなあだ名はまつよいものかわ 拾五・一一

蔵人ハ我か物かおにして帰り 二二・三三

紀内一賛。しかし、これは正式な「沓冠」とはいえない。したがって、この句では侍従の

歌の最下部(沓)を、蔵人が歌の最上部(冠)につけたのを、和歌技法の言葉「沓冠」をきかせて「沓を冠に」と洒落た句作であらう。

青木―礎稿賛。前説の如く主題句は「沓冠」をきかせた洒落の句作。故事の方は「沓冠」と見て差支えないと思われるが……此の歌が世に広まって「ものかはの蔵人」と人に呼ばれたのであらう。

ものかはと云つて蔵人ぬきを取り

安八・義7

西原一賛。待宵の小侍従の話。新古今の恋。

室山―同。「待つ宵に……」の歌は、『新古今和歌集』(巻十三・恋三)に載っているが

「物かはと……」の歌は『平家物語』(巻五「月見」)に、蔵人と待宵(の小侍従)との

歌問答としてある。

清―諸説に賛。

岡田―同。

25 一生にめてたき内をはき出され

八木―平素は、人を家から掃出すようなことはいないのだが、奥人の際は再び家に戻らぬようにと、箒で花嫁を掃き出す風習があった。本句は「めてたき」となっているが、これは「めでたく」の誤刻か、それとも「めでたき内」と読むのだからか。ともかくも、花嫁さんは、一生にただ一度、おめでたい家をはき出されて出て行くのである。

紀内一賛。但し実際に箒ではきだしたというが、その例証どなたか。

青木一賛。婚礼の際の奇習はさまざまあった

であらうし、地方では現在も行われているのであるが、類句は見当らない。乞御教示。西原一贊。『嬉遊笑覧』巻八に「人の去るに三日掃かず」。死ぬとずつと掃かぬような事が記してある。嫁入りはその逆というわけである。したがってこの場合は掃くと縁起がよいのである。

室山一諸説贊。
岡田一同。

26 此水を呑なといふが玉に疵

八木一高野の玉川については、弘法大師の「忘れても汲みやしつらん旅人の、高野の奥の玉川の水」の歌があり、この川の水には毒があるという俗説があった。この水が飲めないということは、いわばこの川の玉に疵、「玉に疵」で、玉川を暗示している。

玉のきず弘法大師見付け出し
わすれても汲なといふが玉に疵

青木一贊。

一ト川は毒が流れて玉に疵

室八・一〇・一五
旅人にくむなといふハ玉に疵 第三七

岡田一なぜこんな伝説が出たかといえ、太古は圃（かわや）すなわち圃は川屋で、川の上に便所を突き出して作った。自然の水洗便所である。高野山は衆徒三千といわれたほど僧侶がいたから、それへ垂れ流しでは汚い。それで高野玉川には毒があるから飲むな、という歌が出来たのである。弘法大師がこの山

を開いた頃にはまだ衆徒・参詣人も少ない。従ってこの歌を弘法大師の作とするのは俗説にすぎない。

27 東帯の浪人二月下旬出る

八木一不明のまま一解を示す。

東帯へちいさく建る金屏風 二七・13

鎌市であるうか。二月十五日頃から三月二日まで鎌人形の市が立つが、東帯の「浪人」といふ言葉から、売れ残りの鎌であるうか。

紀内一鎌市説贊。礎稿にあるように二月下旬から鎌市が立つたという例証は多い。浪人とは主人の定まっていな侍であるが、それ同様未だ買手（仕える主人）の定まらない、店に出ている鎌を詠んでいるのであろう。売れ残りには関係あるまい。

青木一礎贊。当年の鎌ではなく、前年の売れ残りの鎌が鎌市開催早々に出されたというのであろう。

西原一礎贊。今年の売れ残り鎌であらう。二月の下旬となると鎌市の盛りは過ぎる。買手の定まらないのを売れ残りというのである。

室山一売れ残り鎌贊。

入江一質流れの鎌であらう。まだ主取りせぬで浪人といったもの。

清一西原氏説に贊。

岡田一古道具の鎌と解していました。鎌市が立つ前の二月下旬から店頭にならべる。

28 是ハ／＼と母の待つッおそさくら

古川柳の専門誌

『季刊古川柳』

〒214 川崎市多摩区三田五―二―四

川柳雑誌研究会

八木一俳人安原貞室の句に「是は是はとばかり花の吉野山」があり、これからの文句取り。句意は、娘が婚期を逸して売れ残りになって来ている。早く嫁いでくれ、と母が待っているにもかかわらず、あつというまにオールドミスになってしまったというのである。紀内一息子の花見くずれ吉原行と考えていました。花見に行つてくると云つて出かけた息子、いつまでたつても帰って来ない。訳を知らない母親は「是は一体どうしたのだ、こんなに遅くまで花見をしているのかしら」と家々を回して待つている状況と解したが……。

青木一貞室の句の文句取・縁語仕立の句であるには違いないが、句解は前説紀内氏説の「息子の花見にかこつけての吉原行」を知らず、帰りの遅いのを氣を揉んで待つている母親と取り度い。花見からの帰宅のおそいのを遅桜と洒落たのであろう。

岡田一同。花見から息子の吉原行に贊。

「旅人」以後の

麻生路郎作品

三十七年四月号

不朽洞句帖

ぼんちとの鞆当丁稚哀れなり
初恋は年増だったとぼんち云う
祭将棋ぼんちの相手さされて居
ぼんちもう金に詰った姿見せ
社長まだ若さを誇る自家用車
二号邸の方が政治の電話なり
首相攻撃一番無難で面白し
停年退職鉢植提げて帰って来
僕と鉢ともに切れ味わるくなり
欲も老いたか一つ一つを捨てはじめ

大阪通信病院川柳会「鼻声」

若旦那あの鼻声をとても好き

南海電鉄川柳会「抗議」

末っ子の抗議はママを味方にし

— 28 —

富柳会句会「地元」

地元ではただのおっさんだったのに

三十七年五月号（不朽洞句帖）

散歩

今日は私鉄ストだと云う、足を奪われたので仕事の
予定が一日狂った。ユウウツな顔をしているので、
散歩でもしていらっしゃいと追い出された。一日の
収入を棒にふった高価な散歩である。

ご迷惑をかけますと弱い足へ云う
子ども好き散歩の足をしばしとめ
散歩散歩こんなところに橋がある
散歩でも余裕に見られる人に逢い
散歩かいと女子大学に見おろされ

混浴

混浴の女のボリウムに圧され

名誉市民

大阪にも名誉市民が生れた。白川朋吉翁、菅権彦翁
がその光榮に浴された。

名誉市民その尊さは皺だった

南海電鉄川柳会「規則」

顔もあげずに規則です規則です

（傍 島 静 馬）

クレージー巨匠展

東 野 大 八



陶磁器の業界紙である私の勤め先の社が、さる三月中旬、東京の帝国ホテルを会場に、日本陶芸巨匠大展というのを催した。

陶芸家に加藤唐九郎、楠部弥武、浜田庄司を筆頭に加藤唐九郎、清水六兵衛、楽吉左衛門、酒井田柿右衛門、加藤幸兵衛など六十九人、この道のツウならずともまことにチョイとしたものである。

ことのおこりは一昨年の暮、一パイやって「日刊の中央紙もようやらん日本のトップクラスの巨匠を一堂にあつめてイチカバチか度胆をぬいてみたらどうじゃ」

男ならやってみなでうちのオヤジをついおだてたに火がついたというわけだ。中国大陸の新聞社で戦前は事業部畑を専門に歩いたこの男だけに、フム、フムと二度うなつて考へこんだら本当におっぱじめてしまったのである。陶芸のトの字も知らぬずぶのシロウトのやることは怖い、と実施と決った瞬間、一

ときボカンとしてしまった私だが、いま思へばこんなこの道のドロウトだからやれたのかも知れん。とにかくバカなカネも使い、アホなお座敷も派手にひろげて、どうやら巨匠も格落ちの手合いもまぜ合わせて、六十九人ずらりとガン首と作品を揃えてしまった。

てんやわんやの東京本社連中たちをよそに言いだしつべのこちらは大展だけが業界紙じゃねえ、石油ショックじややれコストインフレだとあつふあつふの一般やきもの渡世のご連中へのニュース提供が大事と、開催の前日まで知らぬ顔の半兵衛で、陶芸家の大先生方のお守りなんぞ真平御免というハラだった。

ところが前夜になって、忘れていたわけじゃあないだらうなあ、これこれの汽車にのつてぎひきてくれとの社長電話だ。なんだかんだと御託を並べて逃げたものの、結局、扶置米を頂く宮仕えのかなしさで、開催当日、重い腰を新幹線にのつてた。

会場に着くなりテーブルカット、うちのオヤジと谷川徹三センセイのハサミだ。来賓がワンサといて、陶芸評論家ややきもの学識経験者はもとより、絵画、工芸の美術畑のエライさまに、モノ好きな外国大使の夫人同伴というのまでいる。後刻、宮中の妃殿下御何人方も見えるはずという。

こういう貴顕紳士淑女に、全国の陶業界代表によるパーティが別室であつて、午後一時からは一般解放、日刊紙大手各紙に芸術新潮まで広告したこともあつてか、テーブルカットのころから続々と参観者が詰めかける。

こんなわけで当方会場に着くなり、眼の回るほどフリ回されて、一般開場のころは、控え室でのびてしまった。

さて、ながながと手前ミソのわが社の開催行事のあらましを書いたことだが、実のある話はこれからである。

まず、話のあたまだが、開場直後十五分間

で、巨匠中の巨匠と目される作品二十数点がアツという間に赤札がついた。豊蔵、唐九郎の抹茶々碗いづれも一個六百万円也というのを筆頭に、百万円台のセンセ方のあれこれがラグビーのボールよろしくタツクル購入のラッシュである。ついに、口髪金ブチ眼鏡の紳士が、なぜ購入序列をきめてからやらのだと私のおでこに囁りつきそうにならたて一幕もあった。

そうかと思えば、すり切れた亀の子たわしみたいなおばあさんやおばちゃん連が、ああこれもいいわね、こつちも悪くないーてな調子で五十万、七十万というでこぼこ茶碗や、活花のけったいな鉢を、スーパールの特売場のポリバケツを買うような調子で会計室へ。

くるわくるわで、入場料お一人千円なりの窓口へは長蛇の列だ。私は来賓受付場のテーブルからこの有様を眺めて、この狂乱インフレの世相の現実下になだア然、ポカンとするのみ。一体、陶芸とか、やきものなどというしろものはそも何物なりやの妖異怪説を耳にする想いに捉われた次第である。

かくて初日はあつという間に閉場、その夜は帝国ホテルの最上個室に私はおさまった。むかし餓鬼のころ、修学旅行でこのホテルの玄関口に立ったのをしおに、記者稼業上、数度このデラックスなサロンをうろついたことはあるが、枕ひきよせ一夜をそこでという豪華な体験はけだし今回が初めてのことである。

開催の会場費三日間で千八百万円（雑費こ

み）昼食代二千元、夜食ともなれば最低三千五百円、それもトリカゴの餌ほどの中味でハラの虫も舌打一つするどころではない。

かくて美濃の山出し人足の私奴は、キンキラキンの肩の凝る一室をあとし、回転ドアをはね上げ、夜の街へととび出し、たどついたのが数寄橋ガード下だ。ここはモーターたる豪煙けふる一画。名物のホルモン焼屋の砲列がワーンといつて日暮れ時のラッシュ。

「イヨ！旦那、上かんでいこう」

「お疲れさん、リポビタンデー、このイセキへどうぞ」

これなる哉、焼酎よ二級酒よモツの味、古池の水に戻ったフナみてえに、こちらさん、たちまちゴキゲン、グラグラの小イスの列に割り込み、おでこたいて、酒だ酒だ。タレをたぎらせるガス、練炭コンロに肉片のふきあげる煙、また煙、江戸サラリマンやかこかき、とび職のイキのいい大群のいと生ぐさきこの人間どもの一大野宴の放将さをみよ。こちらたちまちコップの一派いでラッパでも吹きたかくなつた。くそくらえ巨匠大展、あなここのカナルホテル！

「ナニツ、たわけだと、いま一度申されよ！オノダ少尉どのはだなあ」

「まあまあ落ちつけ、三十年といやあな、おれが入社して停年までよ、その間中だ、女も抱かず酒もなくジャングルのけら虫一すじ」

「そもそも忠君愛国、中野学校はだ！」
「両どなりはこんな話でわんさか、ワンサカ。
「イヨウ、センセ、ここにいたのかよ」

その声が耳元でなりましたたと思つた切り背中をすん。手の内にとびちる酒でふりかえるとヒッピーの成れの果実たいのがうしろに一人。よくよくみれば、これぞ巨匠の一人、天下のやきもの師だ。

「やあ！××のセンセイ、まあどうぞ」

「よう売れとつたなあ、なんとこのモノ不足、インフレ、節約時代によつて百万三百万とへたな茶わんを気安く買いくさつて、アホな奴がまだまだ後を絶たんあ、おい二級だ」
「そういうこの法界坊の老ヒッピーのてこぼ茶碗もたしか百万円台に手が届いてたはず。」

「そんなご大家が、二級酒ですかい」

「二級もゼイタクよ、山へ帰ればイモ焼酎にスルメの足よ」

かくて巨匠大展二人組の掛合万才開始。

土管の口を切つたような花立てが、ナニイ五十万だと、笑わせるな。三島女郎衆の長襦袢みてえなのが百万とおいでなすつたよエッヘッヘ、それにくついているお客の男のシミみてえなのでそば粉菓子鉢ときたね、ありやあおめえタンつぽだぜ。いい飲みっぷりでござんすねえ、と江戸前に親爺がこんどは冷やで法界坊につぐ。唐九郎先生だつてオツにくだけて自称ドロヤ、文化勲章なんぞルパングのおつさんにやっちゃまいなよ。

どうもお江戸も花の盛り場の有楽町界隈ときたら、どうも子母沢寛の小説のセリフみてえでいけないね、ええおい。巨匠くそくらえホルモン焼の夜だ。

麻生霞乃先生を

月ヶ瀬梅林に囲む

有信新之助

三月二十一日、麻生霞乃先生に橘高薫風、藤村メ女氏らが同乗する新之助の車が、月ヶ瀬の香雲亭（梅久）に着いたのは予定より早く正午前であった。

高山ダム of 南側の斜面の中腹にある、これが料亭かと思うほど古色蒼然とした、一見農家風の庭先に車を着けると、眼下のダムに虹のようにかかる月ヶ瀬橋の近代的な姿が、四分咲きの紅梅白梅の枝振りを通して眺められる。「ああ、ええとこやなあ」と、永年大阪に住んでいながら月ヶ瀬を知らないと言われる、霞乃先生の感嘆の声に、やわらかい早春の陽がふりそそいでいた。

二階の部屋に案内されると、時代がかったガラス戸越しに、京都、奈良、三重の三府県にまたがる尾根に囲まれた月ヶ瀬が一眸に眺められ、お茶を頂きながら河内天笑氏の車の

到着するのを待っていた。周囲の襖には漢詩が枯れた墨色で描かれ、床の間の軸などにも、ちよつと読みのくだらない文字が散見される。

席に就かれて寛がれた霞乃先生は、大島に小紋の羽織、博多帯と色よい取り合わせで、永年和服を着慣れた婦人特有の着こなしから、ゆつたりとした雰囲気が出てきて、初対面で固くなっていた新之助の心もすぐほぐれてきて、傍らのメ女氏の相槌の声に支えられて、お互に好きなお酒の話などで時が経ってゆく。

やがて階下から、西尾菜氏の張りのある声が聞えきて、がらんとしていた大広間に、菊沢小松園夫妻、板尾岳人、河内天笑氏らの笑声が満ちてくる。

久闊の挨拶が交錯するなかでもう酒が運ば

れてきて、菜氏の音頭で乾杯、盃が置かれると、その雰囲気は師弟の間柄というよりは、お婆ちゃんの廻りに集った息や娘や孫達と、傍目からは見えそうな和やかな九人の一座となった。

各方面からの出席の依頼を断わってこれた霞乃先生が、本日御出席頂けたのは、菜氏が能登から送った旅信の返事に、梅の季節になったが、永年大阪に住んでいながら、月ヶ瀬の梅を観たことがない、という霞乃先生の文面に、それでは一度月ヶ瀬へ御案内しようという、菜氏の好意が通じた結果で、今日は心ゆくまで霞乃先生に梅を観て頂こうと、そのいきさつが披露された。

二つのガスコンロにかけられた鍋に、昨今ブライラーの味に慣らされてしまった舌にはめずらしい、土を踏んだ鶏の水煮きが湯気をあげて、メ女氏と小松園夫人の世話される箸

黄銅六角ボルトナット

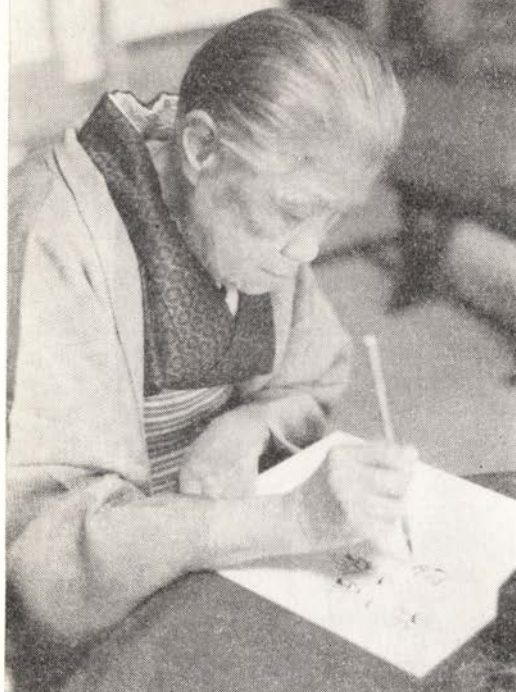
及び特殊換物全般

合資 西出螺子製作所 会社

大阪市天王寺区空堀町八番地

TEL 06 3452104

夜間 06 44008



が忙しく、女は何処でも損やなあとという古川柳の構図が展開するなかで、師弟ならぬお婆ちゃんを囲む一族の面々の顔が酔にほころんでくる。

やがて川柳家がただ梅を観て帰ったのでは意味がないと、栞氏から「ダム」「梅」の席題が出て、「梅」は霞乃先生「ダム」は蕉風氏の選ということで句座となったが、積る話で作句も途切れがちで、締切時間が何度ものばされるなかで、鶏の鍋が煮え詰ってくる。

この香雲亭には著名な文人墨客が訪れていて、その筆跡が数多く遺されているが、亭主の好意でそれが披露されることになり、別の広間にその席が設けられて、披露もその席ですることにして、座を移ることになった。

あり、当然その席に霞乃先生がつかれることになったが、その座につかれた人は殿様の格となり、その火鉢はただの火鉢ではなく、防課上灰の上に火箸で図を書いて戦略を練ったという特殊な用途のものだと説明されて、宿の主人の行届いた接待に感嘆の声があがった。

披露が終ると用意して待っていてくれた亭主が、毎年二・三月の満月になると、現在の高山ダムの湖底になっている川面に、満月の姿が映るところから、月ヶ瀬の名が生れたという、七百五十年前にさかのぼる由来にはじまり、文人墨客が遺した詩歌に十万本という詞がでるほど、かつては野梅の実を煤でまぶして乾燥させて、紅の原料として京都へ送り、その金で租税を納めたという、全盛時代の月ヶ瀬の全貌を語ってくれた。

宿に遺された著名の文人墨客の書や詩の軸を一つ一つ読んで聞かせてくれて、斉藤雪洞あり、頼山陽あり、鉄斎の全紙のめずらしい絵があれば、奥元帥の軸あり、碧梧桐の軸が披露されると、柳俳の別なくその雅致に富んだ筆跡に皆感嘆の声をあげた。

梅一輪二輪姿を映すダム
霞乃先生が書かれた色紙が、栞氏、小松園氏の色紙と共に、この家に永く遺されることになった。

「ああ、もう写真撮れんなあ」という岳人氏の声に外は雨になっていて、暮れるに早い山峡に夕闇が迫っていた。親切な亭主が用意してくれた投光器で全員の写真撮影をして、春雨の中を二台の車に分乗して、月ヶ瀬に別れを告げた。

「梅」 麻生 霞乃 選

老婆と歩幅を合はす梅の道
早咲きの梅へ平家村時雨る
その内に梅も着色されそうな
こぼれ落つ梅にもまろき陽の光
梅はろり散つて失意の日に思う
山男梅の香りを盗んでた
梅に驚カネが出来た絵を習い
紅梅は舞台上と云う姿
霞乃 新之助 岳人 選

「ダム」 橘 高 蕉 風 選

恋二人ダムの深さへ石投げる
のびのびと早瀬の疲れ癒すダム
出稼ぎの父はかえらすダム静か
何も彼もダムの下なり陽は上がる
(人)ダムはいつも底から話しかけてくる
天笑 小松園 岳人 選

(地)ダムの水ゆつくり春の風温くめ
(天)沈鐘の色してダムの黙しけり
ダム暮れてたつた一つの灯が点り
(写真は霞乃先生・カメラ・板尾岳人)
蕉風 天笑 岳人 選

水煙抄

川村好郎選

岡山県 谷川渥子

人並でいい人生がままならず
腹立ちを背に残して靴をはく
まっすぐに歩くきずだらけの楯で
真白な明日に切符を二枚購う
十二打つ時計の正確さに飽きる

柏原市 小谷葉子

遅咲きの梅の香りがいとしくて
欺されることもおぼえて冬女
伴奏はあなたに上げた恋の唄
冬木立子なし夫婦に妥協する
愛の果て孤独の使者となっている

尼崎市 中谷利美

半泣きの顔が出て来た社長室
その割に世事には疎い本の虫
独身に用捨はしない所得税
今ビール通過しましたのど仏

今治市 渡辺伊津志

悪口は聞くまいこつそり席外す
甘やかすわけではないが膝に乗せ
灯台の努力汽笛の音が冴え
寿の字どう崩してみてもめでたい字

神戸市 佐々木 静 泉

感情をおしこめ空虚な対話する
原点へ還るレールも敷いて欲し
巣立つ子へ大空果てしなくつづき
一年を悔いつつ通信書を渡し

西宮市 両川 康 博

過ぎ去った悔は言うまい今日の汗
裏の裏見抜き四十に手が届き
石橋を叩けば後輩越して行き
菜っ葉服汚職のニュース遠く聞き

和歌山市 吉野 富 子

性悲し男勝りの運を持ち
他人には見せぬ涙の寡婦の城
好きでない人と再婚する焦り

忘却に耐える心の詩を綴る

東京都 宮崎 美津子

雄巾の手こまめに春うごく

埋めた筈の想い今年も沈丁花

長男就職彦根へ

まろやかに生きてほしい背に祈り

見送りの手で帰省の日を数え

弘前市 小山内 貞男

旅人に素朴な温み酌む地酒

ふり返る歳月無駄を重ね過ぎ

化粧した祝辞並べる披露宴

年毎に保身にかわるわびしさも

和歌山市 津田 与史

久々の雪に童心ふと還えり

大根の一切妻は恩に着せ

値の上げようも大胆史跡という自信

人に酔い値におどされた観光地

岡山市 長尾 保

野仏もクシャミ出そうな排気ガス

焦点を義母にしぼって今日も無事

口笛を吹くせめてもの反抗か

悪魔かも知れず面影忘れよう

大阪市 鈴木 朋子

衿正しうつ柏手にこめる幸

ちっぱけな幸せ春風髪乱す

和歌山市 秋月 宏方

ぶらんこに乗って哀しみ空に撒く
なんとなく走ってみたい今日の朝

大阪市 神夏磯 道子

行く水に逆らわず凡人でいる

雑言を消化して聞く耳を持ち

地下勤務の夫に済まぬ五月晴れ

換気扇隣は今夜もテキらしい

三重県 川上 富子

深呼吸空気存在確かめる

誰にでも微笑みたくなる春うらら

満一才叱るに叱れないしぐさ

一円貨行きも帰りも踏んでゆき

東京都 山根 白星

あなたとの俄然合ってる周波数

夕風に愛を確かめたく思う

考えた名はホステスにうってつけ

大阪市 阪上 十止庵

結婚という形式に他人が酔い

2DK寿で埋め長女嫁く

人間の欲を集計してる神

守口市 岸 本 豊平次

挨拶を本で覚えたのにつまり

一ト言をみんなおさえている茶の間

「ハイ」言えと子供を親の型にはめ

ストもせず地球自転を怠らず
たべるだけの楽しみだとは淋しいネ
交通禍なかった頃だ金次郎

大阪市 堀 口 欣 一

辞典には節足動物とあって蟹
岡田嘉子帰国二度目は騒がれず
納税のポスターかわい子ちゃんの顔

竹原市 脇 本 政 己

力んでは見ても小さい力こぶ
モナリザが日本に来るげなお地蔵さん
たわむれの掌雪の命絶つ

鳥取県 加 藤 茶 人

朽ちてなお橋まだ過疎の灯を守り
停退へ日課となった庭を掃き
情熱をしっかりとつかんだ指輪はめ

八戸市 安 田 勝 己

気がつけば裸足で駆けてる愛の道
ペットコーナー小鳥も値のある声で啼き
渡り鳥公害縫って来たのかえ

七尾市 松 高 秀 峰

優遇の利子にも縁のない暮し
抜け道もちゃんと作って値上げをし
子の意見入れて見守る母強し

よくはやる病院八卦のうまい医者
寝屋川市 江 口 度

大作家死して初版がよみがえり
出直してみたらと鼻緒に教えられ

青森県 荒 田 つ る

ちぐはぐな心で古稀にたどりつき
家風にも馴染み自分を置きわすれ
ほとぼりがさめて真から泣ける日々

鳥根県 槻 谷 一 葉

合格はやさしい顔の子に戻し
人並に嫁かせてやりたし展示会
良縁へそっぽを向けるもどかしさ

米子市 佐 伯 越 子

激情をやりわり包む沈丁花
旧友は戦禍の影を背負って生き
浅智恵をふりまく女で座が白け

鳥取県 林 露 杖

奪い合い庇い合い愛たしかめる
愛憎を敢て糾さず腐れ縁
笑い合う女虚実を織り交ぜて

豊中市 安 藤 寿 美 子

女の子は私大でええと負け惜しみ
受験料入学金と春寒し
裏庭の忘れていても咲くすみれ

大阪市 秋 田 茂

いやだいやだ銭の匂いが身にしみる
やり場ない怒りも熱も青春譜

雨に帰るおやじの影がうすくなり

羽曳野市

麻野幽玄

うらはらな心は声に出ぬ笑い

不義理もう云訳出来ず通夜の客

病み居ればこそ明日への夢を抱く

鳥取県 福

田保子

割ばしも満たし開店客を待ち

トランプへ占つてみる岐路にたち

情熱を賭ける職あり嫁きそびれ

守口市

野呂右近

椅子深く掛けて自信の眼鏡拭く

世をすねて覆面すれば息詰り

よく読んで飲んだが薬効きもせず

鳥取市 大

塚豊生

善人の居眠り地蔵の顔に似る

栄転の内示新調へ踏み切らせ

下取りへ渡す愛車を磨き上げ

和歌山市

若宮武雄

刀抜く気なきそうな五月びな

夢が気になってと娘から電話

岩の意地浪の誘いへ動かない

豊橋市 鎮

浪翠月

聞く耳はもたぬとつむじまげられる

生活にゆとりが出来て老いている

前略御免 金無心

胎動をうれしく茶の間の凡夫婦

大阪市 仁

ことわりもなく面影が胸に住む

子に賭けた女の意地の半生記

さりげなく許したあとへ足すルージュ

松江市 梅 本 登美也

スリッパがひんやり並ぶ性病科

あつてよしなくてよい課がある役所

ご近所の意見も聞いて孫育て

裏山も宅地になっていた故郷

タクシーが来ましたよと追い出され

備前市 武 内 雅 堂

一年中走って雲に叱られる

甘い夢みていて愛のこけし購う

大洲市 堀 内 暁 風

節約が暮しの智慧となる世相

酒癖を知って飲ましたのが不覚

大阪市 新 川 貞 祐

涅槃会の心の襞にしみる冷え

おかみそり系譜の名前一つくれ

岸和田市 池 田 香 珠 夫

男世帯泣きも笑いもない暮らし

節約をせよと奇妙なコマージュル

和歌山市 樫 村 ふ み よ

戦災でおんぶした子も背に子供
春雨へ片袖ぬらす人も無く

高槻市 竹 内 花代子
息ぬきに來いと口では言うけれど
家計簿の赤は夫へきかせまい

橿原市 西 本 保 夫
バカになり辛抱して來た勤続賞
課長席関係無いが何かもめ

寝屋川市 井 上 武 松
白衣着る妻の姿に惚れなおし
消毒のにはいそのまま妻を抱く

新潟県 高 野 不 二
酔うて云う言葉ちらりと本音吐く
NHK参議員議員養成所

須賀川市 平 栗 金太郎
日曜も零細業は休まれず
雪なだれ土木工事をあざ笑い

羽咋市 三 宅 ろ 亭
飾られたまんま丸谷の値が上がり
価値感の相違とかでしてやられ

島根県 谷 岡 芳 枝
笹鳴きで寝床をゆする春日和
一言が寝床に刺さり抜けきれず

新潟県 市 川 一 峯
物価高手内職のあはらしさ

雑草は摘んでも摘んでも又芽ばえ

島根県 岩 田 三 和
ふるさとを案内しあつて恋実る
日の丸に留守番させて宮まいり

河内長野市 井 上 喜 醉
平凡な人生にもある起伏
老眼が睨みつけてる予想表

青森県 田 沢 つとむ
公害を責めると値上げほめかし
本番の火事に消火器忘れられ

名古屋市 大 林 曲 手
薬にも毒にもならぬ世辞を聞き
子が出来て夫婦茶碗が欠けたまま

愛媛県 小 山 悠 泉
三寒四温四温を猫も日向ぼこ
陸軍記念日元軍人としておぼえ

仙台市 川 村 映 輝
老いてなお迂濶な言葉に汗をかく
大きく値上げして小さく値を下げる

兵庫県 高 橋 近 江
物価高もうそう言うな 村雀
捨てられる義理捨て切れない故郷

大阪府 横 地 正 彰
うつぶなが路上の鉢植ひっかける
活け板どうしようかと案じ咲く

大阪府 花田繁子
気兼ねない暮らしに淋しさつきまとい
敬語ぬきの話は聞くもすがすがし

大阪府 浜西駒子
コマール笑いを売ってひきつける
目をまわす世相の風にまけるまい

赤穂市 谷口赤童
猫柳彼岸知ってか毛皮脱ぎ
世は乱れ狂乱物価の新熟語

呉市 佐久間文明
良い事の予感がしきり福寿草
先入観払いのけるに入る努力

鳥取市 勝山紫宏
贈物封切るまでの値打ちなり
雑音を忘れてしばし花を生け

広島県 大島紫光
ひとことの愛がこぼれるいそがねば
陽に祈る誰が明日を保証する

今治市 大本バット
日本を引っ掻き廻すスト季節
事故現場花を絶やさぬ母があり

今治市 今井松花
春近し風呂屋の道で見た獅子座
暖房の節約をして風邪を引き

今治市 古野伶人

重症が巾を利かせる待合室
長期療養医者に注射を指図する
出雲市 谷口あきら

堺市 堀畑奴風
曲られて引ばられても梅の美しく
懐に入れてゆきたい路のとう

墨跡を読めないままに床に掛け
変り身の早き総理は技能賞
泉佐野市 大工静子

糞虫もとうとう廂で冬を越し
一票の無心学会と一言
岡山市 岡英好

D51が主役で橋は耐えている
インフレに追いまくられて賃加工
島根県 穴戸千草

嫁く孫へはほえみかける陽がまぶし
忘れ得ぬ人と夢路でばたり逢い
善通寺市 伊藤歌子

雪どけにあぜの落の蘘春をつげ
物価高へそくりにまで手をのばし
松江市 岡崎雪美

さよならの肩に残雪降りかかり
話すうち共通点が出てはずみ
石川県 岡村花仙人

不景気を我が世の春と占師

前号のストーリー忘れた続きもの

公害で包んだ街もわが故郷

物価高血圧までもあがつてる

一生の願いとまたも泣きつかれ

鈍行の人生待たされ追い越され

我が娘もう何時でも嫁ける匂いなり

籠の鳥抜けたら餌にありつけず

空港裁判々決を聞いて

大阪市 大 国 たかし

寝屋川市 福 富 隆 子

堺市 栗 本 藤 持

今治市 真 山 国 彦

今治市 伊 藤 一 郎

大阪市 平 井 露 芳

伊丹市 檜 谷 漫 柳

音の無い飛行機造る他は無し

あまりにも近しい仲で礼を欠ぎ

どことなく変つてる子に望みかけ

まるやかに遺児と私の徹夜明け

当節は廃品捨てるに金が必要

何をする人ぞ昼のパチンコ屋

老いの身も桜だよりを待ちこがれ

定年へ囁託と云うつき木あり

米子市 江 原 良 二

富田林市 奥 井 春 子

出雲市 藤 井 晴 月

名古屋市 吉 田 文 枝

大阪市 須 浦 つ ね

大阪市 村 島 秀 村

大阪市 内 藤 ますえ

さまざまな心に自分をたしかめる

人の終末それより先に魚と鳥

評論家即先生という阿呆

鉄柵と知るや知らずや孫子来る

エデポスコンプレックス夜の錯倒

先妻と後妻を分けるカーボン紙

河童なら皿に水鳩は平和な糞をたれ

河童とは皿に水鶴は平和の翅を折る

・近 作・ 高 鷲 亜 鈍

カビ人間土に埋まり化石化する

人間も千差万別一枚の面

種によって同じ鳥の色違い

黒々と女の肌を冬を書く

黒々と女の背中に冬こもる

権力に支えられてる自由主義

三十七億の自分は一人自分の生命

溶けていく水に季節は映らない

火と水で仏の顔は洗われる

同人吟

秀句鑑賞

—前月号から—

菊沢 小松園

一葉の地にかえる朝風も無し

工藤 甲吉

五句とも最近奥さんに先立たれた句、測々として身辺寂莫引込まれるような痛惜を感じて。今年の春の花も淋しい色に映ることだろう心から御同情申上げると共にまた以前のような元気な句を見せて頂く日の早からんことを祈る。

お喋りの女が火種置いてゆく

小浜 牧人

故意か偶然か女はいつの時代でもよく火種を持ち歩く。近頃はそれがコミニケーションの時代意識であるかのようあとで何んか困った事が起きるのも知らぬかのよう、他人の困難は大きいほど面白いと言うのか……。

春の帯後姿のままでよし

高橋 操子

これは織葉柄の描写だけでは決していない、勿論うしろ千万両の意ではない、長い冬に堪えて来た眼には春の着飾った女の姿態は非常

に美しく映ったことだろう。焦点を女の帯に絞って後からピントを合わせたところささと言いたい。

お位牌が見てはるてんご止めなはれ

谷垣 史好

若い寡婦の真剣な顔が見える。てんごは転古で此処では軽い意味の戯語ごとである。大阪弁のよさを生かした軽い句、併し想はもう今日のものではなさそうな氣もする。ちよっとだけ積って雪のほめられる

石川 侃流洞

何事も程度の問題である。過ぎたるは及ばずで自然現象もその例外ではない、もう一寸あればと言う処が適量か。薬でさえ度を過ぎれば毒になる、ほめられる間が花である。

古稀をまだ炎える火種はもち合せ

本多 柳志

身心ともに健者な句主にしてこの句も生きる。埋み火も目に見えぬ処で秘そやかに炎え続けている。埋み火のも一度炎える風を待ち、か。

大衆はつまり張り子の虎だった

羽原 静歩

諦めて遅れながらもついてくる、大衆も何時かは考える輩になる、張り子の虎に魂の入った時は進軍ラッパの響く時だ、革命の歌声の末現する時だ。

品不足先ず空瓶に陽が当る

高橋 千万子

物価高品不足先ず空瓶に心が動くのも女らしく面白い。心の動きを現象として陽を当て

たのもさすがに巧手と言いたい。古い素材も扱い方で生きると言う良い見本か。

どの指も大事手袋着せてやる

岩本 雀踊子

十指みな処を変えては働けず皆大切な欠かせぬ十本である手袋を着せるも休ませるもよろし怪我せぬように、軽いタッチの判る句。

追い越してからの歩巾はマイペース

小島 蘭幸

追い越してからほっとして振り返り、という句が昔あった。それが現代は振り返らない。サッサとマイペースになる処に割り切った心理の冷たさを見る。日頃見過しているこんな瑣事にも時代の感覚は見出せるものだ。

にんがつの星は劔のふれる音

河内 天笑

二月の星は凍るという平凡を避けて劔のふれる音、言い得て詩人の眼だ、劔の触れる瞬間にこそ凍る以上の冷たさがある筈だから。

金剛山お前も噴火したかろう

板尾 岳人

金剛登山二百五十回に迫る山のらしい句人も自然もただ事ならぬ近頃の世相に金剛山を両手で愛撫してよしよしと有め透かしして居ようなほは笑ましい錯覚さえ感じる。

▼板垣草丘氏（出雲市）から一五月十二日は緑之助句碑一周年記念になります。日御崎吟行句会には皆様方のお出掛けをお待ちします。七月七日は島根県文芸協会主催の川柳大会となり役員一同苦慮中です。

川柳塔の句風

本多柳志

◇柳誌「川柳塔」は故麻生路郎師の遺児である。遺児とはつまり二代目のことである。二代目が先代と同じ性格に育つとは必ずしも考えられない。所謂不肖の子もあれば又、先代を凌ぐ鬼っ子にもなる。川柳塔が先代「川雑」の不肖の子か又は鬼っ子かは、見る人の目に依っても一様ではなからうが、果して川柳塔の作品は「川雑」のそれと、どう変わったかを時々柳友に聞いて見る。「大変に変わった」これは川雑時代からの旧い作家のおおむね一致した評である。然らば一体どう変わったと更につつ込んで見ると

一、句に軽味がなくなつた。二、句にユーモアが稀薄になつた。三、総体に面白くなくなつた。理屈っぽい、川雑時代の所謂路郎色が見られない。

これは大変に淋しいことだ。これが大体の評判のようだ。一応ここで「川柳雑誌」の創始者である故路郎師の川柳の定義をお借りして見よう。それには「川柳とは十七音でつづる人間及自然の性格を素材として、平言俗語

で表現し人の肺腑をつく人間陶治の詩である」と言われている。人の肺腑をつく人間陶治の詩は独り川柳の独占物ではない。短歌、俳句、詩の凡てがそうである。然らば西の路郎師に対して東の三太郎の川柳觀を見てみよう。

三太郎は斯う言っている。「川柳は入り口がたくさんある。どこからでもはいれる。だが出口はたった一つだ。それは更に、君の生命の中にはいつて行くことである。」と表現はちがうが人間の心を問題にしている点で両氏とも同じことである。次に同音の短詩俳句とはどこがどう異なるかと吟味して見よう。

俳句は専ら花鳥風詠であるのに対して、川柳は専ら人間風詠の詩である。併し俳句でも人間を詠むことも出来れば、川柳でも花鳥風詠も出来る。のであってどこまでが俳句でどこからが川柳だとはっきりと一線を引くことはむづかしいと思う。併し川柳にはどうしても俳句にはないものがある。即ち軽味、滑稽、穿ち、の三要素である。これが俳句と川

柳の違う大きな要点であつて、最近のように川柳的な俳句であつても、これの三要素の欠けているものはやはり川柳の部に入れるべきであらう。「川柳文学」の塊人主幹は川柳塔の創刊号に次の一文をよせている。「もしも我々が似ていないなら川柳と俳句を区別することは出来ないだろう。だが、もしも我々の句の一つ一つが違っていかないなら、作品と作品を区別することはできないだろう。」と。◇序論はこれ位にして、果して然らば川柳塔の川柳が「川雑」のそれからどう変わったかと問われれば、「川雑」の作品を知らない若い作家は別として、大いに変つたと考えることは事実であつて、変わるのは当然すぎる程当然なので、変らないのはむしろおかしいのである。元々川柳は其の時代なり世相を背景として、そこに生活する作家の作品だからである。戦前戦中戦後の四十年の世代作家の作品を主軸とした「川雑」の川柳と、戦後の一応安定した平和の時代、高度成長下の作品との間にはげしい変化が見られるのは正に当然の現象であらう。

變つたことが川柳の進歩であるか退歩であるかは自ら別の問題である。然らば一体どう變つたかはこれ又見る人の目に依つて千差があるが、柳志は柳志なりに一応分析吟味して見たい。

先ず第一に目につくことは、おびただしい女流作家の台頭であらう。現に毎月の雑吟投句者の中に五六十名の作家の名が見える。大體女流作家の句は、作者が女であるというこ

とだけではなく、作品其のものも又女でなければならぬと思う。川雑時代の女流作家は従来の男の川柳を伝承していたように思うが、最近の川柳塔の作品に見られるように、皮肉や風刺、批判といったものこそ少いがほのかな女らしさが見られる。つまり女を詠んだ川柳ではなくて、女が詠んだ作品に変わったということであろうか。

いろいろと塗って美人に憧れる
倅に招ばれる帯は松くすし
夫婦愛老い知りそめてなお深し
髪形へ妥協をしない顔のしわ
女であることに今朝も紅を引く
手を握り返して女なぞをかけ
欺される事も覚えた花ごよみ
らの作品はどうしても女でなければ詠めない境地であろう。

次に挙げなければならぬのは、所謂私川柳の減ったことであろうか。川雑時代には腐るからこれも喰べとく肥りよう 梨里老いぬれば老いの仕事のあるを知り 香林らの外、梅里、豆秋、多久志、白柳等々の外にも私川柳作家は多士齊々であった。私川柳の好作家といえ先ず静馬さんの、洗練された飄逸な表現には、一目も二目も置かざるを得ない。

洗濯好きの妻に着ごろを脱がされる 静馬
総入れ歯ゆっくり喰べてるわけてなし 同
トルコ風呂呂知らぬ野暮さを笑われる 形水
物価高天高けれど肥えられず 一栄
土曜日がひまになっても喰えて行き新之助

海釣りが川釣りになり池になり 圭井堂
等極少数の作家が見えるのみである。併し其の作品の内容は川雑時代のそれに比べて、より具体的になって来たことに気付くのである。次のような川雑時代の私川柳
別居でもしたらひとの気も知らず 梅里
快復へ拍車をかける孫が出来 清子
電話鳴る度不渡りかと思ひ 多久志

等の句を見ればこのことがうなずかれる。
◇字数に制約があつてあまり長くは書けないが、結論的に所謂時事吟に触れて見たい。時事吟については川雑時代から余り歓迎されなかった関係もあつて、川柳塔にも少いようである。

時事吟については路郎師も「其の生命が利那的であり題材が白熱している時にこそ、其の価値があるが、一度其の内容の対象が世間

一分間の柳論

ある句会の互選で一つの句が多数の得点を
得た、私にはどうにも理解の出来ない句でし
たが、その句を推選した人達は「はつきり分
らないが何か格調があるように思う」と異句
同音におっしゃった。

造りは醤油にわさびで食べてこそ造りで、
同じ魚でも衣をつけて油で揚げると、フライ
と言うまったく別の物になってしまいます。
造りは造り、川柳は川柳の作り方、味わい方
でないと本来のものではないわけです。

村上春巳

私は二十数年川柳を作つて居て、短冊に書ける句は幾らもありません。川柳そのものの体質からでもある訳ですが、確かに川柳は難かしいものです。と言つて他所からの借りもので川柳を飾り度いとは思わないし、川柳から出て十七文字を作る気持は有りません。難かしいだけによい本当の川柳を墓場までの職味として作つて行き度いと思つて居ります。

釈迦に説法で恐縮します。

の耳目から遠のく時には、句としての生命が稀薄になる」と戒めていられる。新しいビッグニュースや有名人のゴシップを句材にして作るのが一般に言われる時事吟であらうが、其の時代の時事性をもつたものであれば、広い意味での時事吟であつたこの意味からは、川柳の大部分が時事吟へ入れらるべきものである。注意すべきは単に時事性を詠むだけではなく、其の事象を通して世代への批判がなければならぬと思う。

もやもやが一度に晴れたみことのり
お月さま残念ながら負けました
大本営日本一の嘘がばれ

豆秋 同 柳志

開戦と終戦を読んだ句である。

引き揚げて自分の墓へ手を合せ
引揚者の笑えない一コマである。

葭乃 柳志

日本の政治あちらへ聞きに行き
校れば血潮したたりそうな社会面
北まくらさせた姿の日本地図
同 志

等は比較的寿命の長い時事吟であろう。

私は以前の「きのうきょう」欄で、詩人よ
もつと世相を怒れと書いたことがあるが、三

残念ながら

直原七面山

「路郎先生の遺風が……」このことです
が、残念ながら私は、川柳塔のいずこにも、
その遺風を偲ぶことは出来ません。

あたかも四季が次々と移り変ってゆくよう
に選者が変わっていったのでは、それは、望むべ
くして望み得ないことではないでしょうか。

ズバリ言われて頂ければ、どの選者の方々
も、あの路郎師が選に当ってお見せになられ
たような、「スパツとした切れ味」も「磨き

すまされた牙え」もお持ち合わせでは無いよ
うです。また誌上を飾る数々の作品も「川柳
らしい川柳」は段々と姿を消し「生きて躍っ

ている句」なども至って数少ないようです。
これは選者が「怠けている」とか「片手間

の選でお茶を濁している」とか「選に命を賭
けていない」とかと申し上げるのではなくし
て、歯に衣を着せず卒直に言わして頂けれ

月号に一三夫さんは「怒れ・川柳」と叫んで
おられる。誠に同感であってこの汚れ切った
世相を怒るには川柳こそ格好の文学である。
私は川柳塔の作品にもっとも「怒る川
柳」を寄せられることを期待して駄文を終り
たいと思う。

ば、少々選の「荷が重すぎ」「役不足」の感
がなきにしもあらずです。また、どうひいき
目に見ても「選者学」についての知識がいさ
さか乏しく「選の本義」が充分には理解され
ておらず、呑み込めていないのではなからう
かとさえ思われる節もあります。

その上、選に進歩の跡が全然見受けられな
いことも私をいたく悲しませます。

こう見て参りますと、大変失礼な申し分で
はございますが路郎師に比して、誠に「御勉
強不足」であり「御力量御不足」であらせら
れるように思われます。しかもなお、私をよ
り一層残念がらせることは、その選の蔭に、
投句者への「おもねり」などが、チラホラ顔
をのぞけているということでもあります。

さて、「師の遺風が……」云々はしばらく
おくと致しまして、現在の川柳塔に川柳塔ら

しい「句風」なり「川柳塔らしい特徴」が一
体現存するかどうかという問題であります
A 選者の時は、柳誌は赤色で彩られ、そし
てB、C 選者の時はみどり色であり黄色であ
ったりして、あたかも虹の如く輝いていたの
では、これはもう「句風」がどうのこうのと
言う段階ではなく、「師の遺風が……」など
ということは、そう言うこと自体誠におこが
ましき限りのように考えられるのですが如何
なものでしょう。

皆様もご承知のように、少くとも「川雑時
代」には、柳誌は勿論のこと柳人の端々に至
るまで、これ全て「紫」一色に塗りつぶされ
ていて、日本の川柳界にその偉容を誇り、さ
んなと光り輝いていたものです。

そして私達は、それを無上の「誇り」と思
い「光榮」と感じて、全ての言動のよりど
ろとなし、作句に、川柳活動に日夜励み精進
して来たものです。

そこで考えられることは、およそ「一柳社
の句風」などというものは、これはすべから
ず、その柳社の主宰者（選者であり最高の指
導者である）と投句者（柳社に属する柳人）
との間に、切っても切れぬ「師弟関係」が存
在するところに、初めて、自然発生的に生れ
出て来るものであって、今の川柳塔社にこれ
を求めることは、酷で無理なことかも知れま
せん。

皆様もご承知のように、こと川柳に関する
限り路郎師には「何人といえども絶対に犯す
ことの出来ない卓絶した威厳」がありました

例へば、一度師の意に背けば、たとえその作家が、師が長年手塩にかけて育て上げて来た愛弟子であっても、またその弟子が、日本の川柳界においてこの人ありと言われる程に有名で名作家であつたとしても、あるいはまた、柳社運営上欠くことの出来ない程重要で貴重な人物であつても、師はしゅんしゅんするところなくあえてその弟子を切り、その弟子を追放して悔いさるだけの「勇氣」と「決断」と「氣概」がありました。

どのように他の人々から「がん固者」「判らず屋」だなどと、如何に「ののしられ」「非難され」「糾弾され」ようとも、師はこれらの声には一切耳を貸さず、これらを完全に無視し去つて、ひたすら「自己の信じる

生駒から

麻生 葭乃

— 中島生々庵宛 —

お忙しい中をお訪ねくださいますと有り難うございます。また岡山からのおこづけのお珍しいお品のかずかずありがたく頂戴いたしました。おくれはせながら今日岡村久志良様へお礼状を差し出しました。小石様へもよろしくお礼申し上げてくださいませ。お菓子も海苔も毎日の楽しみにいたします。

中略—生駒へ参りましてからだんだん寒がりになりまして、眼がさめたら終日火鉢のそばにかじりついています。老人が灯油を使うのは危険だからと電気炬燵を部屋へ置いて

道」を突つ走つてゆかれたものです。

そうした師の「人間的な強さ」に「川柳観の偉大な強烈さ」に心魅かれ圧倒され、私達「師」とともにある「こと」に「生きていることの喜び」を感じ、常に「輝く希望」を胸に抱きながら、川柳に励み、いそしみ、いのちある句「をも」することを中心で師に誓いながら、(価値ある)充実した日々を送つて来たものです。

従つて、今の川柳塔に一日も早く、こうした路郎師に勝るとも劣らぬ「峻厳」にして「鋭利」な指導者の現われて来ない限り、川柳塔の「句風の確立」は勿論のこと、その将来性についても余り大きな期待は持てないのではないでしようか。

川柳塔を取り巻く作家達が、日々「生氣」を失い、未来に何んの「希望」も「目標」も持たず、川柳することに「生き甲斐」も感ずることなく、無為な川柳生活を送っているというこの事実を、心ある人ならば誰もが感じているのではないでしようか。

では現在の川柳塔社に果して将来性は皆無なのではないか。もし問う人あらば、私は将来性は確にあるとお答えしたい。

しかも路郎師の遺風を徐々に川柳塔の誌上に回復しつつ一大発展を遂げることの出来る道が、良策があると。もし心ある人ありてあえてその秘策についてお尋ねあるなら、私はそうした人々と一夜ゆっくり膝をまじえて語り明してみたいと思います。

くれています。が、炬燵へもぐり込まねばならぬ程の寒がりでもありませんので自分一人の時は減多に使いません。外気を防ぐためには黄色のカーテンを閉めています。

電気炬燵のこたつの布団も黄色。坐布団も黄色。寝床の毛布も黄色。掛け布団も黄色と黄色づくめでですので笑われています。

いつか葉さんにもそう申しましたら、葉さんの申されますには、黄色は中国では皇帝より使われない、つまり皇帝の色だそうです。

私はどう云うわけか紅色がかからない黄色は何となく明るくて清純な感じがするので好きなのでございます。色言葉では友情とか申します。薫風さんは紫が好きだと聞いています。紫という色は何となく沈んだ感じが

たします。紫はさめ易いとか申しまして結婚式のようなおめでたい席ではいみじくられます。その段ふじ色ははなやかな色でございます。紫の親類すじではありますが……。

内職に藤色があるたのしさよ。きさ子というのを思い出しました。時々手紙をかいている最中でも印象づけられた句はふと心に浮かびます。

私はその意味から申しますと常に感銘深い句を詠みたいものだと思っています。然しもうだめです。八十の坂を越したら情緒も何も彼もかれきつて終つて気のぬけたビルみたいな句より出来ません。そういうても乗りかけた舟なんです。時々日記へメモ代わりにかく事もございます。—後略。

金婚シリーズ・その一

東郷元帥逝去のときの主治医

福井野迷路氏

— 福井よし子夫人 —

この三月十五日限りで福井野迷路元海軍々
医中将閣下は『福井病院』を廃業された。一
もう年だからね、むすこや孫がうるさいので
小川静観堂氏（元陸軍々医大佐）のように隠
居することにした。とおっしゃる。閉院三日
目の十八日にお訪ねした記者へ、開口一番、
隠居の弁だった。

本社裏の北側の通り、鰻谷中之町四に野迷
路先生宅がある。応接間で先生と雑談を交わ
しているとき、よし子夫人が静かにはいって
こられ、葉子さんにはよく使いに来てもらっ
ているが、記者とは初対面だった。葉子さん
から常々聞いていたが、気品と美しさをそな
えた七十六歳のよし子夫人には実のところ圧
倒されたかたちだった。京都府立第一専門部
卒業が二十一歳、生家が灘の醸造家で多くの
女中さんにかしずかれながらもよくはたらか
れたそうで、それが美と健康につながったの

ではないかと記者はおもった。

「先生も奥さまも、ともに美男美女で、とく
に先生は若いころモテたでしょうね」

「軍人はお金を持ってませんからモテようは
ずがありません」と夫人。

「先生とはお見合いですか、恋愛ですか」

こんな無礼な質問に、さすがのよし子夫人
も驚かれたか、

「そんなことまで、云わなければいけません
か」

と、一本注射をお打ちになる。先生が三十
歳、よし子夫人が二十四歳で結婚。先生は軍
医大尉だった。夫人のご両親が生存されてい
たら、軍人との縁組には反対されたに違いな
いと、つけ加えられた。当時の結婚に恋愛は
ふしだらとされていたから当然見合結婚だっ
た。

野迷路先生は同志社中学—三高—京大と秀

オコースから任官されたが、なんといっても
先生畢生の大仕事といえば、東郷元帥が臨終
の時の主治医として活躍されたことである。
先生が常に口ぐせのように云われる『四さ
ん』、つまり大岡さん（秀吉）西郷さん（隆
盛）乃木さん（希典）と東郷さん。どうして
もこれらの人には『さん』がつく。ところが
楠木正成を楠木さんとは云わないし、徳川小
五郎（家康）織田さん（信長）木戸孝充（桂小
五郎）を木戸さん、大久保さん（利通）とは
云わない—とのことである。

先生が東郷平八郎閣下を尊敬されているこ
とは、いつお会いしても東郷元帥（弘化4・
12・22 / 昭和9・5・30 / 1847 / 193
4）のおうわさが出ることもわかる。日本
海々戦でバルチック艦隊を全滅させた軍功な
ど話されるとき先生の目はいきいきとかが
やくのである。

元帥が逝去されたとき八十八歳で、福井信
立軍医大佐は四十四歳だった。

「きみは、いくつだね」

「四十四歳であります」

「ほほう、わしの半分か……」

と云われたそうだが、—今から四十年前の五
月三十日に逝去されたが、その時の国葬は前
代未聞の盛大であった。記者もよくおぼえ
ているが、もちろん歌舞音曲鳴り物一切停止
だったし、全国各戸には弔旗をかかげ全国民
が哀悼の意を表したものである。

当時のマスコミに元帥の容体をつぎつぎ発
表されたのは福井軍医大佐からだった。

のちの野迷路先生には二名の中佐が副官としてついていたそうで、

「へえ、中佐が副官ですか」と記者にはおどろきだった。

「静観堂さんの副官は新之助さんだったね」ユーモアもなかなか卓越したものをもち持っている。

「このごろの副官はダメでな」と、夫人の方



（令息やお孫さんたちに囲まれた福井野迷路先生とよし子夫人、外遊中の令孫もおられる）

をチャリと見られる。夫人はやさしくほほえまれ、

「なんしろ福井ときたら、哲学書を読んでいるかとおもえば医学書を読み、そうかと思うと川柳塔をひろげ、それがみな本棚から出しまんまで、部屋の中は本だらけなのです。この副官は後かたづけばかりさせられています」

とは、これまでの五十三年間、いやこれからもこれ以上の副官は世界にはいない。

「わたくし、東野大八さんや富士野鞍馬さんのものが大好きで」

「へえ。奥さまは川柳塔を読んでくださっているのですか、これはありがたいですね」

「わたくしもへたな川柳を作ったことがありますのよ」

「へえ！初耳ですね」

「路郎先生の選で『皮肉』というのへ出しましたが、福井の名で一句だけ抜けました」

「抜けました」という川柳語までご承知とは、先生とよく川柳の話をされていることがよくわかる。

「『皮肉なりサボテンの花美しく』というのでした」

あのぶさいくなサボテンが、あのような美しい花を咲かせる意外性を見つけたのであろうか。

「弟も不朽洞会員だった」と、先生。

「これも初耳です」

「句集『私達』に故長谷川迷路というのがあ

る。弟が迷路で兄が野迷路だ」

「聴診器あてる場所なき細りよう」迷路ほか佳句が『私達』に発表されている。かつての軍医中將閣下も、こと川柳となると、

「むずかしいものだね」

と夫人と目を交わされる。

「先生はうまいですよ、一昨夜（3月16日）も阿茶女史から電話で朝日新聞の夕刊に先生や阿茶女史の句の出ていることを知らされ、先生の『赤旗をなせ左手で振らないか』はなかなかおもしろいとこを見ておられますよ。」

勲章をいのちにかえてみた重み

勝ち馬に今日の驕きが臍に落ちず

一窓を出た罵声帰る所なし

一世流りの一つ 酔いつぶされた顔うまいですよ」

「そうかね」

「ところで先生、先生は古武士然とした豪放な方とは思っていますが、文字を拝見するとまったく逆で、小さく、なにか小じんまりした感じが……」

「それは老化現象でな、文字が小さく、左寄りに下がってくるのだね」と説明される。なるほどそういえば、何人かの老川柳家の句稿などに、小さな文字が左寄りに下がってきているのがある。

「先生の句には若さがありますよ」

「そうかね」

そこへよし子夫人がレモンティを運んできてくださった。

「八年前、福井が背広を新調したいというのです。ご承知のように体が大きいのでレディメイドはだめなんです。若い者なら先きが長いので新調してもよいでしょうが、なんしろ老人ですからね。その日、南区医師会が伊賀の上野へ行きまして……」

「ぼくも連れて行つてもらいました」

「そうでしたか——。その日、中島生々庵先生に、福井はあと何年ぐらいい生きられますでしょうか、とうかがいましたら、あと五年ぐらいかな——とおっしゃいました」

「そんなムチャな」

「ところが八年すぎて、ますます元氣なんです」

背広を新調されたか、どうかはおたずねし

NHK教育テレビ（五月三十一日午後十時十五分放映）

『この人と語ろう』——藤山寛美さんを囲んで

語る人々

正本水客・若柳潮花・菊沢小松園・山川阿茶

聴く人

NHK教養部・川崎正孝

オブザーバー

中島生々庵・不二田一三夫

NHK教養部の川崎正孝氏が東京から川柳塔本社へこられ、四月からはじまった「この人と語ろう」第二回目に松竹新喜劇の藤山寛美氏がきまり、各層の人々と語りあうわけだが、そのまゝに、いったい川柳家はどんな目で寛美さんを見ているか、そこが聴きたいと

なかったが、この伊賀上野観光の帰りのバスの中で、居眠りしていたぼくのズボンへキャメルやチョココレートの紙を細くさいて、相撲取りの前下がりのようにくつつけた坊やが二人いた。ミナミでコーヒーをのんだりして帰宅し、ズボンを脱ごうとしてはじめてこのいたずらを知ったことだが、この腕白坊や二人は野迷路先生のお孫さんだったのである。「そんなことがありましたの」と、よし子夫人は笑いながら頭を下げられた。「その孫がもう大学生になって、一三夫さんになつた編集用のタバコがそっちへ行つてしまふのですよ」

先生は編集用にと、長い間のこと、ぼくにタバコを毎月届けてくださっている。武骨一

本の先生の一面にこんなやさしい思いやりがある。やっぱり親分肌の方なのであろう。スベースがなくなつたが、このほかに英国皇弟コンノート殿下が元帥杖を献上に来日され、先生がカナダまで侍医としてついて行かれた話はつぎの機会に発表したい。（不）

★

▼前号訂正—P27の「東京へ電話掛けいと云う手紙」は、今治市真山国彦氏の作でした。▼同じくP15、室谷徹舟氏の作は「水虫もすみになった老いの足」です。

（校正は文や句を読まず、字にとらめつことをしていますので、判りよく楷書でお願いいたします。泉も書きようで白水となります。）

いた。オブザーバーとして生々庵主幹と編集部の不二田一三夫も出席した。

まずNHK川崎正孝氏は、役者としての藤山寛美さんのサービス精神、または大阪人としての心意気など、川柳家の皆さんはどういう目で受けとめているか、ということだった。

水客「アホ役をつづけていることは観客へのサービス精神だろうが、ややマンネリ化して魅力がだんだん薄らいできましたね」

潮花「天外さんの芸に似てきましたな」

小松園「お師匠はんやからな」

潮花「このごろまげ物をよう演るけど、あれはあまり好かんのです。もちろん内容は新しいですけど……」

阿茶「寛美さんのアホは、プラス・アルファがあるでしょ、ただ単のアホやのうて、最後に賢しこにお辞儀をさせたりして」

—寛美さんの芸から、川柳のネタになるようなものはないでしょうか。

阿茶「ありません、全然」

小松園「義理人情が主やから、いうたら古いわな……」

阿茶「松竹新喜劇からでは川柳にならんわねえ」

なかなか川柳家の目は辛らつである。では川柳家はどのような藤山寛美を望んでいるのか。

生々庵「新歌舞伎座で公演したら、また別の味が出るのではないかね」

水客「たてまえはあそこ（新歌舞伎座）は弁当をたべさせんことになつてゐるから、演つて演れんことはないでしょうけど、新喜劇は弁当をたべるのが楽しみのお客が多いだけにやっぱり中座が一番よろしいでしょうね」

潮花「寛美さんのサービス精神は、弁当をたべながらお芝居を見たらう……そんなのもおもしろい」

小松園「このごろの観客層も前とちがうてだいが変つたね」

阿茶「このごろは、なんでもやけど、芸がしつこうになりましたわ」

一三夫「それはね、お客がわるいのですよ。たとえば落語にしても、キレイにさらりと落としても客には分からない、そこで、し

つこく二度も三度もくりかえす——これでは味もなにもない」

生々庵「東京と大阪では客層も相当ちがうだろうね」

水客「東京から大阪へ来ると受けんようですな」

生々庵「学生時代、よく金竜館（オペラ専門の劇場）へ行ったが、ああいうのは東京でないとダメだったのかな」

デン助劇団や軽演劇は東京で育つたが、五

部劇や新喜劇のようなドツシリした劇団は大阪のものであつたようである。ここで、田谷力三の名がとび出す。七十五歳の歌う不死鳥のほど、この座談会の平均年齢が想像されようというものだ。

小松園「その金竜館には藤原義江とはいってましたな」

一三夫「戸山栄二郎といつて、新国劇から田谷力三にあこがれてオペラ入りしたのですね」

——ところで、時間もすこしたちましたので、こんごの寛美さんに望むもの、といえはどんなことでしょうか。

水客「シラノ・ド・ベルジュラックのようなモノをやつてほしいですな」

潮花「新国劇で演つた白野弁十郎かーまげ物はキレイやけど、これはええやろな」

阿茶「けっきょく寛美さんは、ワンマンにならざるを得んのですやろな」

小松園「新喜劇を見に行く云わんと、みな寛美を見に行く云うさかいにね。しかし役者はそろつてますね」

寛美さんのワンマンというのは役者がいないというのではなく、彼の人気が大きすぎるからである。そしてなかなか座員思いらしく、だいたいテレビぎらひで通つている人だが、舞台中継などによるギャラを座員にすこしでもうるおしてやりたいというのが本音のようである。

小松園「アホ役は観客へのサービス精神やろな」

一三夫「国から授章されるほどのアホ役ですし……」

潮花「千葉蝶もうまいな」

一三夫「あの千葉蝶三朗とイキの合つたやとりは日本一ですよ。それと伴心平ね」

潮花「よう笑うひと」

一三夫「うちの女房なんか、寛美さんと伴心平が出てくると、伴の舞台で笑うとこばかり待つてる」

潮花「アドリブがうまい」

水客「アドリブがうまいから、同じものなん回でも出すのやろな、受けるから」

生々庵「なかなか注文はむずかしいね、では五月三十一日をたのしみにしましょうか」

プロデューサーとしての川崎正孝氏の手腕や司会の鈴木健二アナに大きな期待をかけて、このハプニング座談会をおわる。（不）

（当日の出演は山川阿茶さんだけに決定）

水煙抄

秀句鑑賞

—前月号から—

若本多久志

出稼ぎに異郷の朝は冷た過ぎ

佐伯越子

現代社会の病巣とさえ言われる、出稼ぎ生
態から生れる数々の悲劇は、余りにも多くの
問題を我々に与えている。その一瞬のため息
とでもいう、下五の利いた佳句である。

他人に娘をやる大安の日を選ぶ

阪上十止庵

手塩にかけて育てた、わが娘を嫁がせる父
親の気持は、喜び七分に抵抗三分という複雑
な心理である。今までもここに幻想を求め
た佳句は多くあったが「大安を選ぶ」段階で
これを描えている点が、優れていると思う。

肩書きの数程顔のしわもあり

大原葉香

軽いユーモアの中に、アイロニーの利い
た佳句である。人間、地位が出来、金と閑が
自由になる頃、襲ってくるのは数々の老化現
象による哀愁であろう。

売る方も高いと思うキャベツの値

小山悠泉

物価狂乱の世相を消費者の面から、かこつ
た句は多いが、売り手側からの物価高を捕
え、チョッピリ反省も混えた発想に敬意を表
する。

波に身をまかせて水鳥くずれない

槻谷一葉

たまたま筆者が数日前、奥志摩の英虞湾
で、遊覧船のキャビンから8ミリを撮影中、
この句のようなシーンに出会い、胸に刻まれ
た人生訓も、この水鳥の生き方であった。観
察の鋭さと、句意の深さを賞したい。

露のとう憂いを秘めたのも混る

三宅ろ亭

春と共に萌え出る草木は、すべて喜びにあ
ふれているように思い込んでいる、人間のエ
ゴ？に、一矢報いた佳句として頂いた。

トンネルを出れば故郷も雪の国

岸本豊平次

今は亡き、川端康成先生の代表作「雪国」
を、再読するような格調高い句として味わあ
せて貰った。

羽ふりいい頃の写真はヒゲもたて

荒田つる

何かギシギシと干枯びた世相の中で、こう
したユーモアたっぷりな句を味わうこと
は、一陣の涼風に会うようである。

お題目あげてる妻の別な顔

井上喜醇

路郎先生の句に「夫より通帳の方を頼って
居」というのがあるが、女房族もこの齡頃に

なると、夫婦生活の感激もなく、金か食か、
お題目か念仏ぐらいにしか、意慾を燃やすも
のがなくなるのであろう。

隣席と黙ったままの旅続く

加藤茶人

外人が我々日本人を批判する一項目には、
必ずこの句のような国民性を指摘する。そう
言われて反省をしながら、なかなか、欧米
人のようにいかなない我々への、頂門の一針と
でも言うべき句か。

以下、紙数の関係で割愛した秀句
野仏も歩いてみたい春うらら

保幽玄

不覚にもタンポポ屋根へ根を下し

豊生

うす味へ妻の氣遣う老いを知り

繁子

予備校の隅でひっそり二十才

すっぱりと自分に浸る夜が好き

前号訂正 P3 九行目を「歳々年々人同じ
からず」―若本多久志。

▼浜野奇童氏（岡山県・弓削川柳社会長）
から一勤務校の校舎改築も大詰、三月の卒
業式に間に合わせるよう内部設備の購入や
何やらと校務に追われ―中略―路郎先生の
句碑建立二十五周年記念西日本川柳大会、
心の重荷として抱きかかえ、何んとかして
霞乃先生をお迎えして、九月八日（日）新
装なる文化センターで開催するよう計画し
ております。期日は変更ありませんので、
生々庵先生にもよろしくお伝えいただきた
く存じます。―後略―

川柳 中山道六十九次 (15) 富士野鞍馬

68 草津

守山から一里半(五・九キロ)此駅、東海道、木曾路街道、尾張道等喉口なれば賑し。宿中に立木明神のやしろ、上善寺、駒井氏が活人石等あり。尋ねて見るべし。と図会にある。

この宿の名物は姥が餅で、

姥が餅草津が宿は地にかなひ

姥が餅馬で乗り込む三度笠

英雅(八四一六)

評判は馬迄這入る乳母が餅

風松(一一二一九)

——大きな家であつた

草津の矢橋から、湖上を大津へ渡るのもあ

義仲寺へ一筋に行く矢橋舟

百々爺(一一二八三)

義仲寺は大津

唐を見て其日矢橋に帰帆也

一徳(四四二三)

——唐は瀬田唐橋

矢橋の帰帆は八景の一になっている。

69 大津

草津から三里二十四町(一四・四キロ)

此処はむかし(六六七)天智天皇が、大和飛鳥岡本の宮から遷都されたのであるが、天皇崩御(六七二)壬申乱(六七二)で、大津宮は焼亡して、歌にだけのこっている。

ささ波や大津の宮のあれしより

名のみ残れる志賀のふる里 光行

東海道、中仙道とも、京都へ入る最後の宿駅である。湖岸には諸侯の蔵屋敷がならび、船の出入にも賑った。

大津からあのおしやんすきはじめ

(拾二)

錢提て大津を帰る山法師

(武三三二)

関一度越えぬ日は無し大津牛

赤子(二六一九)

大津から京都弁がきかれ、山法師も徘徊したのである。京への間に逢坂の関があつた。

これやこの行くも帰るも別れては

知るも知らぬもあふさかの関

と蟬丸が詠んで、その辺に庵居していたといふ。蟬丸は琵琶を弾いたので、

琵琶の曲行も帰るも立とまり

三松(四四一三)

蟬丸の宮居に近き琵琶の湖

カシハ(一一三二二)

名物大津絵は、街道に見世があつた。それは、吃の又平の創始といわれ、浮世絵に似た粗画色刷の版画で、鬼の念仏、槍持奴、弁慶、藤娘等の絵が多く、旅人は土産に買った。現在は一軒だけその名残りが残っている。

大津絵は半道おやま所作武道

錦糸（二四八）
大津絵は上手か下手か知れぬ也

竹子（五〇二）

京の鬼さまを大津で買って来る

（二二一九）

京近い所だが野暮な藤娘

如雪（二六一）

大津の土佐も弁慶をうまく書

帆布（二四四）

一つ余って大津絵を内へはり

雨夕（四七三）

天正十年（一五八二）六月十三日、明智左馬介光春は、大津から乗馬のまま琵琶湖に乗り入れ、水馬の妙技をつくして泳ぎ渡り唐崎へ上り、坂本城へ入ったという。

恐るる左馬なく湖水を打渡り

紀業（六三二）

左馬の助鞭で鎧の藻を払ひ

藤仙（一六三）

左馬のめしたる雲竜は沖を越し

集馬（八七三）

雲竜を描いた陣羽織

左馬が勇躍にかかる源五郎

如雪（一五七）

——鯛

大津の東南に隣接する膳所は、本多下総守六万石の城下で、その城は琵琶湖に面し美観であったので名所にもなっている。

八景はあれが庭だと膳所本多

扇歌（一三三六）

八景の一目に見える御城廓

雨夕（三二一九）

この附近の粟津が原は八景の一つで、寿永三年（一一八四）一月二十一日、木曾義仲が戦死した所である。

晴嵐に昇る朝日も雲隠れ

千之（一五七九）

木曾殿も粟津が原は夕日也

志水（四〇二〇）

——義仲は朝日將軍

粟津野で干る唐崎の雨合羽

梅丸（八四二）

——唐崎の夜雨も八景の一

晴嵐をながめ野分を書きかき

雨夕（四四二九）

——石山寺の紫式部源氏物語

義仲の遺骸は、粟津の傍に葬って「義仲塚」が建てられ、その後天文年間、近江の国司佐々木高頼が、その塚の側に義仲寺を建立した。

義仲寺に和田内とした銀包

野萩（一五四二）

——義仲の妻巴は和田義盛と再婚

それからずっと後元禄七年（一六九四）十月、松尾芭蕉は大阪で客死した。その遺骸を遺言により義仲塚の隣に葬った。

風流と武勇と背くらべ也

青露（四〇五）

世を去った翁朝日と後ろ合

川島（二九二八）

桃青が塚は尻から日があたり

如雀（二七七八）

——桃青は芭蕉の別号

陸路大津に入るには瀬田長橋を渡る。この橋は唐橋とも称し、中途に小島があつて、大橋一七五m小橋四二m、東詰に竜神祠、秀郷祠がある。八景の一に入れられ、この橋で秀郷が大百足を退治たという伝説がある。

めづばうな虫けらの出る瀬田の橋

吉扇（二四三二）

大黒が毘沙門ねらふ瀬田の橋

水治（七二五）

——大黒は秀郷、毘沙門は百足

御大禄百足のよふにせたの橋

鞠丸（六六三）

——大名行列

七所を見い見渡る瀬田の橋

律長（一四三）

富士形りに湖水の産だ瀬田観

清原（七五三八）

——鯉が名物

北方の三井寺も八景の一で、梵鐘は日本三銘鐘の一である。

へんてつもなく三井寺の朝の鐘

——

——

——

——

——

雨夕（二八三〇）

——八景では三井晩鐘

藤太には不用三井寺では重器

雨譚（四四八）

——鐘は秀郷が竜宮から貰ったという

八景でてりふりなしは三井の鐘

窓梅（二九八）

——他の七景は四季晴雨がある。

三井寺観音は西国十四番の札所で、その御詠

歌は

いでいるや波間の月を三井寺の

鐘のひびきにあくるみずうみ

これより奥へは女人禁制であるが、七月十五日には女人参詣を許し、それを「女詣」とい

つて賑わった。

三井寺も一日は咲く女郎花

（武十五七）

紅粉匂ふ三井寺の秋一ト日

赤子（一四六二八）

また南方に見える石山も秋の月が八景に入

れられ、

石山をすべった月が膳所へてり

（拾二一）

紫の硯へうつる秋の月

雨夕（三三二四）

——紫式部は石山寺に籠って源氏物語を

書いた、その硯というのが現存

石山につくねんとした美しさ（二九）

石山でできた書物のやはらかさ

市東（三五三二）

五十四帖を石山の月にかき

文和（一六一八）

——源氏物語

石山で須磨や明石の物あんじ

志夕（二八一七）

——源語の初巻

順礼びっくり石山に生きた雛

巨眼（一六一八）

順礼が来ると式部は筆を置

（六九）

——石山寺は西国十三番の札所でその御

詠歌は

のちの世を願う心はかくとも

仏の誓ひおもき石山

近作

今治市 月 原 宵 明

犬にまで嗅がれとことん落ちぶれる

老醜のトレードマーク黒い痣

政界をかって担った車椅子

文化財モンペを穿いたただの人

大洲市 米 沢 曉 明

制服でしかも如才のない男

切符切る車掌に財布のぞかれる

いいとこに節穴のぞけというように

岐阜市 市 川 鱗 魚

梅の茶屋老いの出会いも酔な窓

若いとはいいいなお酒が生きてゐる

田がくの味も見合いのお気に召し

東京都 池 口 吞 歩

「考える人」の見事な肉体美

食うための嘘考える自己嫌悪

考えるだけは考え不眠症

今治市 長 野 文 庫

みかんにもニス塗るかっこよき時代

旅三日小鳥隣の手で飼われ

落書きを母校へ残す愚かしさ

木一本植えて母校と縁切れず

理 容

岩 田 美 代 選

フランスの理容とやらにひっきり
理容店の鏡誰も左利き
禿げるまで妻に任かせた丸坊主
理容師が切りたい程の髪伸ばし
理容師は鏡の中へお辞儀をし
仕事申道を聞かれる理容店
理容師の白衣を見ても泣く子供
外遊を賭ける理容のコンクール
見合する親子揃って理容店
父ちゃん理容母ちゃん美容が理想像
ベテランの理容びったり顔に合
行きつけの理容師無口でいてくれる
如才なくさよかきと散髪屋
放浪は理容免状ふところ
前後から眺め理容師はさみ置く
嫁入りの道具に混る理容器具
貴婦人の顔で理容台のテリア
子供好き床屋を選んで連れて行く
これ位あればと床屋なぐさめる
理容師の誇りに鏡もめている
年頃の姉妹刈って理容店
散髪がすんで背広古う見え
平和日本犬の理容所豪華なり

里 宵 明 風
近 江 彰
正 彰
一 風
松 花
国 彦
バ ッ ト
七 面 山
奴 風
白 水
翁 童
香 祐
貞 祐
登 珠 夫
漫 柳
ど ん たく
同 人
無 人
か つ み
登 美 也
千 翁
右 近

安い床屋安い匂いに出来上り
首だけを床屋にあずけて戻りたい
おしゃべりの客に剃刀持ち直し
理容師のなんぼ褒めても児は動き
散髪に行く気になれば月曜日
長髪も刈って面接胸を張り
三本の髪にもスプレーする理容
足して二で割ればと思う客の髪
職人にあらず理容師の蝶ネクタイ
髭の濃い客が嫌いなムシタオル
脱理容長い髪をもて余し
借金をしに行く頭刈りに来る
優勝盃手にして縁起の髭を剃り
蒸しタオル夢破られた理容いす
長髪は長髪なりのエチケツト

不 二
み の る
重 人
弘 生
寿 美 子
露 杖
梁 水
梁 水
与 根 一
肖 二
柳 信
柳 太
軒 太 楼
綾 女
千 代 香

佳

理容師に気がねする程のびている
理容料表彰状の横にかけ
インターンのため息聞いたうしろデコ
刈り立ての頭メンテプルの顔
政党的批判理容師口を閉じ
美容師に缺の婿をたのまれる
頭ひとつ義理三軒の理容店
ひよっとして狂うか理容師の刃物
天 地 人
軸
ハンサムの鏡がならぶヘヤージュ

古 方
柳 太
弘 生
花 梢
一 風
木 魚
弘 生
芳 子

三 月 号 から

北 川 春 巢

三日号の「女流作家フェスティバル」は
みごとでしたね。驚きましたことは、今ま
で男の人だとばかり思っていた人が、女
の人だったことです。例えば大森孝華さん、
藤田眞留子さん、嘉数千代香さんなど、小
生の認識不足だったのでしょうか。

川柳は女性でも男性と変らぬ句が作れる
ものだ、という証明でしょうか。とにかく
驚きました。そう思ってみれば、句も女性
のように思えます。男性か女性か、を頭
において選をすることも必要のように思いま
すね。

「一分間の柳論」で鶴丸さんがいって
おられるのは同感です。

四 月 号 から

池 口 吞 歩

四月号の「雅号ぶっちゃけばなし」の長
野文庫氏が、東洋文庫という店名だったと
か、実は私共の図書館の方にも東洋文庫と

鳥

岡崎祥月選

母子寮の庭へ子雀来て遊び
餌をねだる小鳥が肩へ来てとまり
しあわせな窓へ小鳥が来て唄う
渡り鳥日本の住み処狭くなり
鳥飼うて三日坊主で餌を忘れ
鳥飼うて鳥肉食べる気になれず
空を飛ぶ小鳥を幼児不思議がり
一坪の庭に囀る春の声
春近し小鳥が庭へ来て唄い
餌をくれる人になつた渡り鳥
愛鳥に逃げられ少年貝になる
鳥還るぼつぼつ汚染減つたんか
児ができてからは文鳥放つとかれ
小鳥屋の前で動かぬ児をせかれ
飛べぬ身で白鳥観光地を泳ぐ
銃声に鳥が逃げこむ禁猟区
遠う眼がのぞき小鳥をさわがせる
山に霧晴れて小鳥の声となり
小鳥飼う趣味へ吾が家を狭く住み
鳥達のぬぐらこわしてハイウェー
お隣りの旅へ鳥籠あづけられ
裏山の鳥黙ってる日の不安
国宝に住んでテレビに写る鳥

康博 軒太 千代香 一風 伶人 パット 七面山 春風 曉風 翁童 古方 洋々 カズエ 素身郎 翠月 木魚 代仕男 弘朗 右近 豊生 武雄 不二

小鳥屋の主人小鳥と客を待ち
来年を指切りしよう渡り鳥
一羽ずつまた大切な鳥が絶え
春や春庭の小鳥がよく歌い
大空へ円を描くトンビのマイペース
列島の汚染のなかに耐える鳥
刑務所の塀で雀があそんで
焼鳥で心の通う友と酌む
春を呼ぶ鳥はソプラノボビュウだの
鳥籠に飼われて青い空知らず
オウムまで一緒にあって反抗期
王様のように孔雀が人を寄せ
十姉妹いと睦まじく卵抱き
巣立ちする小鳥に空が広すぎ
寝たきりへ手乗り文鳥首かしげ
病窓へチュンと雀が見舞いに来
青い鳥唄う少女の瞳がきれい
餌を替えて鳥と対話のひとりもの
鳥籠で生きる強さを鳥は持ち
こわされる自然を小鳥さびしがり
鳥を飼う心孫の瞳はきれい

久亭 竹馬 みのる 保子 静泉 晴月 露心 越子 梁水 伊津志 芳子 無人 思月 登美也 里風 千翁 与根一 悠泉

▼おことわりー「おもちゃ」山本立児選
が締切が過ぎてても返稿がなく、かてて交通
ゼネストにまきこまれ連絡もとれず、次号
に発表させていただきます。(編集部)

一三夫
は唯々感服。過去も現在もそして未来に
も、又幾度となく繰り返えされる問題でし
よう。考えるべき問題ながら果たしてどれ
だけの人が考えているのでしょうか。
一井の中の蛙にもある住み心地 呑歩
で何れも余計な事を考えず、御無理御尤もで
体制に順応しておればそれなりに川柳家と
しての地位も確立し、選者としての名も売
れ井戸の中は井戸の中なりに住み心地があ
るという事でしようか。それで、あとで芽
を吹けという事であれば天下泰平で万々歳
なのですが現実には果たして然りでしょう
か。「川柳年鑑」の広告感謝します。

一永田町呑歩にデカイ書庫があり
と詠まれたのには、詠まれる当人がびっ
くり、確かに蔵書三百万冊、世界第二位の
国会図書館に勤めておりますが、それだけ
にカード一つを索くのも大変で、大方は灯
台もと暗し、お恥しい程、勉強は出来ない
というのが現実です。
一川柳のソルジェニーツイン氏も追われ

一新聞を切りぬくくらしなど知らず 水府
一近所まで来て迷ってるらしい電話 形水
など面白いいつては失礼ながら方向音痴
という点、私も同様です。当地ではこうし
た句を土匪吟と呼んでおりますが、その人
柄を偲ぶには何よりの楽しさがあるよう
です。そこで、

初歩教室

題「近」

本田恵二朗

神さまは、われわれ人間に可能性というものを与えて下さっている。その可能性を徒に眠らせておけば、それっきり芽を吹かないものになってしまう。可能性を努力によって生かすなら、そこに能力という素晴らしい芽が吹き花が咲く。従って、能力というものは始めからあるのではなくて、それぞれの可能性を目覚めさせることによって獲得されるものである。川柳を生み出す可能性を持ちあわせながら、努力が足りないばかりに、作句能力が湧いてこないというケースがある。そこで私は、人さまがやれるほどのことが私にやれぬことはないと思つて頑張れと、二十数年来、自分に言い聞かせ、また初歩指導へも主張し続けている。

遠くても男女の仲は近くなり 秀村
遠くて近い男女の仲という言葉は、昔々その昔から言い古されて、おそろく知らぬ人は無いぐらいなものである。それを用いて句を作ろうとすることは、とてもむづかしいこと

で、作ったとしても、いろはカルタの文句はどのものになるのがオチである。私はなんとか作ってみようとしたが大したものにはならない。そんな努力はやらぬ方がよい。
(意気投合遠くて近うなりそめる)

近道は危険信号回り道
遠くとも信号渡れ是近道

下手な標語が出来た。標語や格言を作つて悦に入つてはならない。もう一步精進あれ。
(近道をしてぬかるみに足とられ)

(近道はここよと青信号に言われ)
退院も近い笑顔が蘇る

〇〇もーの一字の用い方に細心の注意が肝要であることを銘記せねばならない。
(退院日近つき笑顔甦る)

嫁く日の近く寡黙の父となり
側近の意見が決断にぶらさる

ご近所はエリート肩身せまく住み
近ごろの老人はと言う古老欲し

近刊と隣り合せた古書ブーム
近視眼の発想で立候補

遠近の間合いで生きてる
(遠近の間合いはよく生きる道)

遠近の間合いが狂つて溝が出来
(遠近の間合いはよく生きる道)

老猫は猫なりの道つづける
(老猫の知恵が近道知つてゐる)

近況の便り同年の愚痴もあり
(近況に同年の愚痴洩れこぼれ)

野次馬の気もちになれぬ近い火事
(野次馬になれないほどに近い火事)

同 同

露 杖

同 翁 童

同 大 成

同 伊 津 志

同 頼 次

同 奴 風

同 奴 風

同 吞 歩 利

同 誓 二

近道と思うて行けば突き当り
近寄れば寄るほど大仏さん偉大
近くから見れば美人のつけぼくろ
(近う寄り過ぎてつけぼくろ見つけられ)

近視眼的見方自分が狭うする
(近視的見方で自分を狭うする)

空席の近くはずらり黒眼鏡
鼻と鼻近づけ細い眉を描き
近づけばほどけた然りが戻りそう
(近づくまいほどけた然りが戻るから)

近すぎてつい忘れがち地元の美
近距離は儲けが薄い乗車拒否
(近距離は儲けが薄い乗車拒否)

商売に近道はない肚据える
サイレンが止り思わす手を休め
(ピーポーが前で止つてあわてさせ)

人生の近道にある落とし穴
側近が下意上達を通せんぼ
近所でも放送局の名で知られ
(放送局の仇名が近所ふれ歩き)

近道の一カ所暗い所を除け
(近道の一カ所暗い所を暗すぎる)

(近道の夜風が顔を逆になでる)
(近道の暗さへなにかゆれている)

もう近い予定日胎児も知つてゐる
(もうじきに出来るよと胎の児が動く)

近道にいやな目つきの犬がおり
(近道で噛みつきそう犬に会い)

近寄つた春の登音雨に聞く
(もう春が近うまつてと雨が言う)

近所から尾ひれがついてくる噂

サ 弘 生 ヨ

静 泉

無 人

同 同

同 同

同 紫 宏

同 利 美

同 同

三十四

同 同

同 同

同 同

同 同

カズエ

近づいてやつと判った男女別
山が近う見えたら雨やでと明治
近寄るな知らぬ名前前で来た包み
近くまで来たと昼食おごらされ
(近くまで来たと昼食おごらす気)
お近い内にと上げぬ気と見たり
(また近い内にと玄関ばらいされ)
近くいるただそれだけでよい二人
近づいた足音大の耳が立つ
(近づいた靴へ耳を立て尻尾さげ)
近日開店をスリも待っている
母と子の顔近寄せて何語る
(ママの耳に口近寄せてなにねだる)
出勤の近道露地をくぐり抜け
(出勤の近道乾し竿くぐり抜け)
ご近所が大切老母が独り住む
近い内に飲もうかと言ったきり

同 本蔭樺
同 度
宗 義
同 重人
同 藤持
保 夫
同 静観堂

(近い内飲もうかがボックリ逝っちまい)
生返事思案へ遠く近くいる
近寄れば小じわの目立つ派手好み
遠くとも近い気のする夜の火事
(遠い火事近うに見せる午前二時)
近眼で眼鏡かけたら顔さえた
(近眼鏡かけてお見せしめてもらい)
近すぎていつでも行ける花を見ず
(近いからまた見逃した花の丘)
近道と思つたばかりに迷子になり
(近道と見たのが不覚遠い抜き)
学芸に近道はなく一歩ずつ
(学究に近道はなし踏みしめる)
おもちゃ屋の近道係はちゃんと知り
古里へ近づく駅の国訛り
近寄れば仁王も優しく招きそう

ますえ
濁水
生 仏
駒 子
繁 子
つ ね
比呂路
満津子
幸 生

(近寄れば仁王案内優しそう)
近づけば富士も普通の山の肌
(近く見る富士の山肌ありふれる)
腹割つてぶつかるから近くなる
(腹を割り胸を開いて近くなり)
近況はあの娘もこの娘も物価高
巧妙なセールス近道までも知る
(セールスの商魂近道もう見つけ)
近づいてよく見やりやどうや男の子
(近寄つて来た娘がナンダ男の子)
少しでも近くへやりたいたいと未娘
(近くへやりたいたいと未娘)
(近くへやりたいたいと縁遠く)
(近くばかり探す末っ娘の縁の糸)
題一草一五月二十日締切(七月号発表)
宛先 岡山県倉敷市下津井三五二七一一
本 田 恵 二 朗

『沙 風』

価 千二百円
送 一四〇円

一沙風川柳社創立二五周年、三百号記念として刊行。B6版・P620、参加全国川柳人三〇九名。発行所一今治市桜井東天神町、月原宵明方。振替口座座広島二八九七〇番。

『根岸川柳集』

一解題 山村祐、著者小歴。東京の生まれ、父は軍人、祖父は山形天童の織田家の江戸留守居役であった。日大法科を卒業後新聞

余情のプラス・マイナス

一最近の俳句・川柳誌から
(朝日新聞夕刊(3月16日付)から——)
一前略一人情の機微をとらえ、おかしみ、輕略。

八 幡 船 社

み、ユーモア、うら悲しさなどを伝える。云々から一中略一口語俳句の衰弱の中で、川柳の新しい萌芽が俳句に近寄っていることに賛意を送っている。
「川柳瓦版」や「川柳二七」の川柳にふれた後——。中略「川柳塔」(一月号)の、
一本職の寿司が妻には嬉しくて 小野 克枝
一フリーセックスそと出は堅固なパンタロン 山 川 阿茶
一赤旗をなぜ左手で振らないか 福井野迷路
にも、マイナス思考があつて面白い。一後(後藤比奈夫)

大 萬 川 柳

「私」

入選発表

選者 川村好郎

投票総数 五百七十句
入選 六十八句

大阪 凡九郎

私を愛える自分を敵にする

私に似た子供の夢破り

もう一人の私にわたしが叱られる

お人好しの母が私の中に生き

路に咲く私でよし陽を信じ

手心という名で私心顔を出す

私にもあったと悩み聞いてやり

私に似た激しさの娘を案じ

移り気な私を笑うコンバクト

泣けるだけ泣いて私の道がす

ともすれば私が嫌になる私

笠岡 白梅子

どこからか私を呼びそう適齡期

どたん場で貧しい私出てしま

もう愛も恋も私を吹き抜ける

無視される私案は口の中で消え

三十の私にむごいドラマ切る

酔い痴れて本当の私見せたげる

目立たない私になり切る日の安堵

まだ下があると私に云い聞かせ

孫育つ私も祖母として育つ

私だけ判る父の足跡よ

私です罪を認めた目がきれい

今 治 青 明

足の勘たがわず私の靴を穿く

守口 瓢 太

ゴーイングマイウエーたとえ風当り強くとも

涙まで見せて私を売るマイク

松原 サヨ

鬼は外追い出す私が鬼でした

大阪 柳 志

つまづいたそこから私をとり戻し

退社ベル私に戻る更衣室

私を覗かせてみる地味好み

五十路過ぎ私の顔になりかかり

私のなやみ知ってる影法師

小さくとも私と貴方で築く城

ずばり云う私見へ強い風当り

カラフルに炎える私に今日がある

上役が何を云おうとマイペース

もひとりの私が賄賂突き返えし

私が笑われますと子を叱り

ネックス私の秘密知っている

藤井寺 吸 江

私一代ですと職人の背が丸い断われと別の私がけしけける

笠岡 桃 里

私の裏が出たがる春の宵

丸木橋渡る私は賭けている

私自身を見つめ直した夜の冷え

松江 晃 男

平凡にあなたの傍にいます私

出陣の私を鏡で整える

ジキールへハイドが挑む夜の灯よ

人間の弱さ私情が混りかけ

私の時間になって主婦日記

私の中にあなたがいるプラン

も一人の私を鏡に問うてみる

娘の癖のなかにひそんでいる私

青空を味方にくじけない私

燃えつきたはずの私を燃やす人

心とは別な私の笑顔です

老いてなお私は明日を信じた
佳句

大阪 柳志
生きてゆく私へ喪服脱ぎ捨てる
笠岡 忠三

身の上を聞いて私をどうする気
倉吉 善句

もう一人の私に逢いたい旅にいる
堺 天笑

わたくしのとこで終ったなすりい
大阪 文秋

決断に私が二人居て迷い
人ノ句
兵庫 可住

言い返す子供の中にいる私

地ノ句

一人の私が妥協の足を引く
天ノ句
岡山 千代香

集団の虚勢わたくしが居ない
選者 吟
兵庫 可住

世間様あつての私忘れまい

昭和四十九年度
ベストテン(三月現在)

一 花 梢 一〇、五 富田林
二 十止庵 一〇、〇 大阪
三 可住 九、〇 兵庫
四 静 泉 八、〇 神戸

一 五 重人 七、〇 松原
二 六 柳宏子 七、〇 大阪
三 七 吸江 七、〇 藤井寺
四 八 牧人 七、〇 神戸
五 九 梁水 六、五 倉敷
六 〇 文秋 六、五 大阪
七 一 千代香 六、〇 岡山
八 二 天笑 五、五 堺
九 三 緑水 五、五 大阪
一〇 四 つき子 五、〇 具塚
一一 五 宗義 五、〇 岡山
一二 六 本蔭棒 五、〇 奈良
一三 七 芳子 五、〇 島根
一四 八 小路 五、〇 豊屋川
一五 九 弥生 五、〇 東大阪

第七回東洋樹川柳賞贈呈

川柳大会

第七回東洋樹川柳賞は武玉川文芸社(新潟)の下村梵氏に決定しました。

日時 五月三日(祭)十二時
会場 明治生命ビル大ホール
神戶市藝合区磯上通八一九一六

兼題 神戶市役所花時計東向い

「深癖」川 柳 塔 橋高薫風選
「打つ」ふあうすと 葵 徳三選
「ヒゲ」番 傘 金泉萬楽選
「嫁」平 安 堀 豊次選
「階段」まさかつと 大森風来子選
「空」時の川柳 三条東洋樹選

記念講演

「川柳仁義」
費 五〇〇円

賞 知事賞・市長賞・教育委員会賞等
合点一〇位まで。

柳画展

藤原英比古氏(柳画研究会主宰)
特別参加の川柳色紙展あり。

主催 時の川柳社

☆

帰米ご挨拶 N・Y 藤村 涼子

一年近い故国での生活の最大の用件であり
ました愚息の結婚も、おかげさまで良縁を得
まして三月十一日無事挙式をすませました。
帰国中は各地の柳人の皆様からご厚遇を得、

一方ならぬお世話になりましたが、いよ
いよ四月上旬帰米いたします。願れば各地の
大会や句会に参加させていただきますが、私なりに
川柳の勉強をさせていただきましたが、何よ
りもあたったかい柳人の方々のご好意に満ちた
お心を忘れることはできません。ほんとうに
ありがたうございました。帰米に際し誌上を
お借りして、心から厚くお礼申し上げます。
皆さま方のご多幸とご活躍ご健勝をお祈りし
てお別れのご挨拶にさせていただきます。

2400 Thomson Ave.

RIVERDALE, N. Y. 10463 TEL 212-796

~ 1564 別宅柳社 1060 SE. ROBERTS

AVE. GRESHAM, OREGON. 97030
TEL-503-665-1028

昭和四十九年度第六回

「焦り」
締切 五月二十日

第七回

「卯」
締切 六月二十日

投句先

〒593 堺市堀上緑町一の三の七
藤井一二三方 大萬川柳係

二〇 古庵 五、〇 笠岡

二一 凡九郎 五、〇 大阪

二二 英詩 四、五 具塚

二三 静馬 四、五 宝塚

以下略

松原 二〇 古庵 五、〇 笠岡

大阪 二一 凡九郎 五、〇 大阪

藤井寺 二二 英詩 四、五 具塚

神戸 二三 静馬 四、五 宝塚

倉敷 二〇 古庵 五、〇 笠岡

大阪 二一 凡九郎 五、〇 大阪

岡山 二二 英詩 四、五 具塚

堺 二三 静馬 四、五 宝塚

大阪 二〇 古庵 五、〇 笠岡

具塚 二一 凡九郎 五、〇 大阪

奈良 二二 英詩 四、五 具塚

岡山 二三 静馬 四、五 宝塚

島根 二〇 古庵 五、〇 笠岡

豊屋川 二一 凡九郎 五、〇 大阪

東大阪 二二 英詩 四、五 具塚

二〇 古庵 五、〇 笠岡

二一 凡九郎 五、〇 大阪

二二 英詩 四、五 具塚

二三 静馬 四、五 宝塚

以下略

柳界展望

(原稿締切毎月末)

▼麻生霞乃先生を月ヶ瀬梅林へ、葉、小松園夫妻、薫風、メ女、新之助 天笑、岳人諸氏がお誘いして早春の一日を楽しみました。(本誌参照)

▼NHKテレビ(五月三十一日午後十時十五分放映)の「この人と語ろう」で藤山寛美さんと出演予定の水客、小松園、潮花、阿茶諸氏がNHK教養部の川崎正孝氏と三月三十日に本社で座談会を催した。生々庵主幹と一三夫氏はオプザーイとして出席。(本誌参照)

▼追記人員の都合で山川阿茶さんだけ出演。
▼柳都川柳社主催で第二五回新潟県川柳大会が六月二十三日開催(本誌参照)
▼第六回美作合同川柳大会が五月十二日午前十時から美作町みまさか会館で開催兼題「期待・風来子選」ヒット・恵二朗選「白・方大選」燃える・奇童選「鉄

・あや子選「交差点・かはる選。投句締切四月三十日(出席待参考)百五十円切手可。投句先勝田郡勝央町黒土山根素蛙氏あて。
▼鈴木可香氏(名古屋市)の句碑が二月十日、国定忠治の碑と共に除幕式が岐阜県瑞浪市明世町不動動で盛大に催された。一男の中の男忠治へ梅薫る一可香。
▼名古屋川柳社創立四十周年記念川柳大会が九月十五日午前十時から名古屋市中区役所二階大ホールで開催。兼題「豪勢・竹林選」生一本・茶六選「手締め」鈴波選「爆笑・呑風選」のんびり・不二也選「出来心・清造選」ふくらむ・鱈魚選「青年像・志ん児選」朗報・幸弘選「はねる・文彦選」まだまだ・規世児選「大物・麦舟選」年輪・鮮山選。投句二〇〇円切手可。投句締切八月三十一日。主催一名古屋市中区米田町十六丁451。名古屋川柳社
▼第十回大陸川柳作家同窓会は本年九月二十八日、伊豆下田温泉ホテル伊豆急で開催。会費六千円、定員制四十人(申込金千円同封先着順)。詳細は「7670姫路市北条・鉄宿40大井正夫

方へ。

▼第28回長野県川柳大会は五月十二日午前九時三十分から松本市中央一九一八松本商工会館で開催。宿題二句吐、同一句を除く。雑詠三と題「変身・許す・句う・財布。連絡先松本市大手三三五一十三しなの川柳社。
▼観光川柳創立二十周年記念川柳大会が五月十二日正午から摩利支天徳大寺大書院で開催。題「驕然・陸橋・荷物・重復・集会・燃料・希望・粘る」特別課題「城・盆栽」事務所東京都港区新橋六三三二伊藤方、東京観光川柳研究会。
▼野辺地川柳社創立五十周年記念川柳大会が六月二日午前九時から野辺地駅前駒井旅館で開催。
▼川柳長屋第十六集は送料共五八〇円。発行所「東京都中央区新川二二五一一五、荻野義博方」。
▼稲元敏太蔵書が兵庫県立図書館(明石公園内開館10月)へ一括寄贈された由。
▼川柳「島」三月号「発行所は岐阜市島ノ島西町一丁目、市川鱈魚方」。
▼藤村涼子さん(ニューヨーク)は四月一日、薫風氏

に付き添われ生々庵主幹と夫妻や一三夫氏に帰米の挨拶に来社された。

▼林蒼蛇様氏(ホノルル)から「花見観光団が出発しました」が交通ストが心配するはるる故国の花を見に行くと人あまり迷惑をかけるようにしてほしいと。
▼市岡曉舟氏(ハワイ)から「ハワイもエネルギー不足で困っています。週数日や自動車番号給油の日で、やっと一週間分確保。二ヶ月会は拙宅で開きます」。

▼北川春泉医博(副主幹)はこのほど退職された。定年というのは管理職にないこと、四月二日に市長から辞令をいただかれた由に数多の病院長、または看護婦学校長として永い間ご苦労さまでした。

▼若本多久志氏(西宮市)は三月十一日から山陰の三瓶、関金、浜村のタビチ諸島へ一十文字星仰いでロマンチストに還り「多久志。帰日後、金沢の令孫宅へ」けいさつとの友誌へ「川柳漫筆」の執筆が誌へ。
▼伊藤茶仏氏(小松市・川柳わかまつ主幹)は二三年

間の納税調停役として小松市から市政功労者として表彰された。

▼浜野奇童氏(岡山県)は片山巷雨氏と来阪、福島鉄氏(高槻市)と共に本社の葉、一三夫両氏を訪ね、今秋開催の(九月八日)西日本川柳大会が路郎先生の句碑建立25周年記念になるのを麻生霞乃先生にぜひ、句碑を見ていただきたことのことであった。

▼尼縁之助氏(出雲市)から「島根県芸術文化祭が七月七日ときまわり本年の路郎忌川柳大会は欠席のやむなきになり残念です。(氏は県芸協協理理事、県川柳協会副会長)。
▼竹中肖二氏(東大阪市)が主宰する東大阪市川柳同好会へ「同市教育委員会の推薦により大阪府教育委員会から表彰を受けられた。社会教育小集団として堅実な活動を続け社会教育の推進に寄与したことに由る」。

▼二十五周年記念のむらくも川柳会主催の観桜大会へ本社から正本水客、西いわを両氏が選者として出席五十余名の盛大。
▼永宗宗義氏句碑除幕記念川柳大会へ本社から児島与

呂志氏が選者として出席、久米雄氏からの要請で祝詞をのべ、盛会だったと。▼春季平田川柳大会の寄せ

書き拝受。久志良、松風、美知、窓花諸同人ほか。▼塩満敏氏(羽曳野市)は「川柳大阪」の編集長とな

新同人紹介

阪上 十止庵

——文秋・好郎・栗・小松園——推薦

内海 幸生

——栗・鬼遊・酔々——推薦

三宅 不朽

——一三夫・形水・小松園・薫風・静水——推薦

行天 千代

——春果・一三夫——推薦

川村 映輝

——生々庵・一三夫——推薦

野呂 右近

——春果・一三夫——推薦

り交通局川柳会のため尽力されることになった。西岡洛醉氏が責任者、顧問格に浜畑胡蝶、兄島与呂志諸氏。▼堀江正朗・芳子さんの愛嬢は松江市役所に勤務。舟木与根一氏が出張所長で、本庁には小林孤呂二氏がおり、たがさが身にしみますと。▼荻野鯨虎狼氏(岡山県)は六月十五、六日花巻市花巻温泉千秋閣で開かれる第十八回連盟大会に宿題「色気」の選者として出席。▼村上春己氏(泉大津市)は職場川柳誌「灯台」を創刊。新人養成に熱意をもちやしておられる。▼三井醉夢さん(香川県)の「灰皿」三月号に、酔夢さんは「私の好きな句」に薫風氏の「運の花は一茎一花恩師の忌」を挙げておられる。▼田垣方大氏(倉敷市)は二月七日川崎医大付属病院へ入院。ガンや胃カイトウではないのであまり心配はないとのこと。早いご全快を祈ります。▼小島蘭幸氏(竹原市)三宅不朽さんがやっと同人になりました。三月十日(氏の誕生日)小野田さんがル

パンダ島を下山した日に。▼新岡回天子氏(唐津市)から「先般の川柳の会の写真を送ります(印刷用には暗いので不採用)虹川柳会は孤軍奮斗のかたちです。▼西尾葉氏(八尾市)から「同業者の総会で足が痺れて来ます。一みやけ屋の貝の雛の紅や濃し」葉。▼本多柳志氏(大阪市)家族連れで北陸旅行の途次、酒井路也氏の出版記念句会に出席後、能登方面へ回ること。一着ぶくれてまだ北陸は冬の風。柳志氏。▼薫風、新之助、岳人三氏が三月十日伊豆から旅信。快的なドライブだったと。▼板尾岳人氏(富田林市)の令息が長野市で骨折、四月一日の夜行で収容されて小島病院へ。四月馬鹿でなかったとのこと。ご全快を祈ります。一線香のけむりへ御守護善光寺一岳人氏。▼第8回岡山県川柳会反省奥津温泉吟行を白百合川柳会が主催。寄せ書に久志良氏や千代香さんの雅号。

▼不田一三夫氏は三月末左足が肉ばなれ、そのまま環状線、地下鉄で往復、そんな無業がたり約二十日間病院通いをされた。新聞「雲わぬ花」を発表。

5月の句会

▼菜の花句会——十三日午後六時から——題・詩・声・来六・園・会場——ボウルパンダ三階会議室。近鉄八尾駅下車北へ百米右側。▼南海川柳会——十六日午後六時から——題・歩道・嫌気・愚ふざけ・会場——南海電鉄本社食堂内。▼大阪川柳会——二十日午後六時から——題・成り行き・甘言・保護・推茸・会場——松崎三丁目大蔵。▼川柳東大阪——二十五日午後六時から——題・緑・渦・五月晴れ・奪う・会場——東大阪市中央公民館二階(近鉄水と駅すぐ南)。

本社 四月句会

会場 以和貴荘

八日 午後六時

未曾有の交通ゼネストの前ぶれでヒヤヒヤ
ものだったが、六四氏のご出席には感謝申し
あげる。前月にひきつづき太茂津氏が武雄、
マサ子、富子諸氏を和歌山から誘われ賑やか
にしていたのだ。

古方氏の柳話はきょうの「お花祭」をテー
マにされ好評だった。(この柳話は本誌に発
表予定) 月間賞杯はガッツ八尾の高杉鬼遊氏
にかがやいた。一八時三十分閉会にご協力あ
りがとうございました。(河井庸佑整理)

進行・西田柳宏子―記録・高杉鬼遊
出席・与呂志・天笑・百酒・太茂津・富子
・武雄・マサ子・たかし・正彰・緑水・六竜
子・柳宏子・一三夫・柳志・古方・文秋・静
歩・静馬・肖二・綾女・悦郎・維久子・花梢
・美幸・幸生・好一・舟・喜風・誓二・葛
城・敏・鎮彦・千万子・生々庵・十止庵・茂
男・美代・好郎・吸江・酔々・多久志・瓢太
・一代・智子・夕花・儀一・庸佑・牧人・幸
太郎・薫風・岳人・雀踊子・素郎・凡九郎・
鶴声・頂留子・小松園・清人・雄峯・弥生・
メ女・栞・鬼遊・葉子。

席題「ケチ」

児島与呂志選

ケチな男がゆっくり百貨店歩く
当てがあるのかケチ手土産を提げ
二次会へ誘わぬケチがついて来る
ある時は自分をせめるケチとなり
小遣いを値切れば子供はケチといふ
ケチケチと貯めてぼっくり死んじまい
二級酒へ一番先にケチが酔い
子のためのケチを子供に嫌われる
ケチと見た仕草を真似るほめに
ケチ三代血は争えぬものとする
ケチ同士幹事にされて纏まらず
子盛りのケチを笑う氣にならず
ひとりの女ですっからかんになったケチ
ケチなこと言ふなと言ふたが出さず
ケチやないゼニがないのや釜ヶ崎
不甲斐なき娘のケチを笑ろとれず
夕飯はよばれるつもの昼を抜き
本物のケチ堂々とケチで居る

席題「車」

山本 素郎選

警笛へ犬も薄目あけるだけ
買ひに自転車買つと子をなだめ
転宅に自転車買つと子をなだめ
車から降りて焼香の顔に笑え
マイカーの助手席妻はそりかえり
歩道橋車椅子から見上げられ
他人様のあわれみきらう車椅子
長崎は雨でチンチン電車行く
花車その名も古典らしい舞い

天笑
好郎
マサ子
生々庵
幸太郎
瓢太
好一
智子
智子
生々庵
十止庵
柳志

かしこい順にマイカーあきらめる
横車押すだけ押させ聞き流し
名も知らぬ車溢れる玩具箱
安らぎと不安を積んで救急車
横車いい年をして止めぬはれ
放置車ふいたずらしたい気もわかる
車座へふみ込んで来た刑事の靴
恋をした日から車がほしくなり
故障した車不便なものとする
まああの暮らし中古車を磨く
クルマで来たと遅れた訳のアホらしさ
うるさ型帰えす車がまだ来ない
ポストまで行く嬉しさも三輪車

席題「花壇」

羽原 静歩選

幼稚園花壇の豆の花も咲き
明日開く花壇へ水を惜しみなく
引越へ残した花壇が後ろ髪
衣替えして花時計春を待つ
ピニール花壇で蝶をまだ知らず
一坪の花壇余生の夢をかけ
追って来た蝶は花壇の中に消え
掛け出した花壇の水は忘れ勝ち
甦える花壇に春のベージュ緑
やと芽が出て花壇に柵がある
咲き揃う花壇切るのが惜しまれて
世話をしたつばみに鉢ためらわず
花の名も知らず花壇を掘りまくる
花壇をつくる大人は童話がしてる
種子播いて花壇へ春が遅過ぎる
ご自慢の花壇は貰った花ばかり

高姿勢父には父の主義があり
高飛車へ女作戦立て直し
高姿勢後姿にある時
確証を掴んでからの高姿勢
返すもの返えしてからの高姿勢
その裏を覗いてみたい高姿勢
焦点が少しずれてる高姿勢
高姿勢豪華な昔捨て切れず
適令期すて揺れてる高姿勢
肩書きがすてさせてる高姿勢
金がモノ言うだけの高姿勢
妻にさえもう高姿勢許されず

兼題「名目」

岩本雀踊子選

智子 小松園 雀踊子 葛城 素郎 武雄 弥生 弥生 多志 一舟

むずかしい名目つけて酔うている
名目を考える知恵別に持ち
名目をつけてなんとか生きて
名目にこだわり歯車噛み合わず
形式と言う名目で辞める
静養という名目で辞める
名目はあとどうとつけられる
名目の出張カバンが知っている
研修という白浜の湯につかり
名目を立てる土産を言うてくる
名目さえつけば出す気の会計課
名目がつけば汚職の酒も飲み
日本語は便利名目という魔術
名目は政治資金のかくれ目
入場券寄付の名目高こうつき
和解する名目子供がだしとなる
こじつけの名目派閥がもめている

正朗 弘生 亜鈍 軒太楼 好義 瓢太 千乃子 柳志 智子 十止庵 静歩 富子 吸江 清人

名目は男の背中へのしかかる
名目は中立雑音の中にある
妥協するその名目が見当らず
名目がひとつの石になる重み
実力のない名目を大事がり
名目は寄付見返りは肚で読み
一応の名目重役秘書にする
格好という名目にこびりつき
名目の演技をのせた舌の先き
お見舞を名目にして逢いにゆく
名目はどうあろうとも左遷です
名目は父娘にしとく宿浴衣
名目はどうあろうとも借は借
名目を建てて予算を使いきり
名目は囑託にして首をつぎ
生活がかかり名目にこだわらず
名目を通して人間をふと忘れ
名目を飾って真実歪められ
名目の蔭に私が沈んでる
遠縁のひとりごとをこして社を休み

岳人 千乃子 好一 悦郎 正彰 清人 与志 古方 悦郎 牧人 生々庵 柳志 柳宏子 肖二 柳太 幸太郎 凡九郎 百酒 醉々 雀踊子

兼題「まぼろし」

菊沢小松園選

まぼろしをつかみぞこねた八十過ぎ
まぼろしの蝶かも知れぬ俸せよ
まぼろしを鉄格子まで追いつけ
夫には言えぬまぼろし抱きつづ
亡き母のまぼろし夢で笑った
まぼろしの夢にまでみた人と添い
まぼろしの浮気が妻に似て覚める
まぼろしよりアルに着色されてくる
夢も老いまぼろしと消えただの人

野迷路 芳子 正朗 一栄 祥子 秀子 弘生 重鈍 藤持

第25回新潟県川柳大会

その日 六月二十三日(日) 10時〜17時

その所 新津市民会館ホール

会費 八百円(記念品贈呈)

宿題/雑詠(各選者に2句、同一句は禁ず)

選者/白石朝太郎・阿達義雄・中島生々庵

・大野風柳

宿題/課題吟(各選者に2句)

「ふくらむ」宮村桂路選「修身」木原美

風子選「風雪」横村実選「闇」入江大

魚選

席題/4題当日10時発表・12時締切。

講演/「川柳映画と芥川竜之介の間」

表彰/各特選句及び合点宿題15位まで席題15

位までに呈賞・総合一位に県知事賞。

▼大会参加宿泊ご希望者は予約金千円(一泊につき)を添えてお申込みください。

▼大会終了後有志による懇親会を同会場でおこないます(会費千円)

主催 柳都川柳社

さし伸べた手へまぼろしの消えかかり
まぼろしを迫る倅を胸に秘め
まぼろしが僕のブランをついに変え
まぼろしの騎士やっぱり夢でよし
まぼろしの母の温みを胸に抱く
まぼろしでなかったルパンダの子の姿
手に出来ぬから幻は美しい

軒太楼 宗義 季賛 柳信 清女 頂留子

まぼろしを作家好みに踊らせる
 まぼろしの影が匂っている民話
 まぼろしを胸に死んだ児の齢を言う
 まぼろしを見る程の恋してみたし
 まぼろしで無いとも仏のたまわす
 想い出のこゝで幻褪せている
 幻に彩ぬりたくて目を閉じる
 幻をカラー写真において見る
 まぼろしのままで乙女の恋終る
 まぼろしの人は何時でも笑うとり
 定年へまぼろしだった廻り椅子
 まぼろしの中でも逢いたい人があり
 まぼろしの君と手紙でおだてられ
 まぼろしも夫の愛に消えてゆき
 まぼろしの母は少女の眸に白し

静馬 醉々 多志 幸秋 美生 栗代 千万子 好一 清人 肖二 柳宏子 儀郎 素郎

まぼろしを追う背に寡婦の二字がない
 まぼろしの母住む町にかかる虹
 まぼろしの一生とせぬ靴を履く
 まぼろしを追えば川巾狭くなる
 追いついてみればまぼろしふりむかず
 まぼろしでも抱ける俸フト思ふ
 幻の女をベンでもてあそぶ
 教育勸語もうまぼろしの文字に見え
 まぼろしの声に階段のぼらねば
 まぼろしを斬ると真暗になりそう
 まぼろしに女房のコワイ顔ダブル
 まぼろしは胸の小箱にしまふもの
 まぼろしはおびえる埴輪の目がうつろ
 まぼろしではない証拠請求書
 マイホームのまぼろし鍵っ子をつくり

十止庵 醉々 幸生 岳人 生々庵 雀踊子 六竜子 柳志 葉子 天笑 静馬 一三夫 雀踊子 柳太 あいき

雅号ぶっちゃけばなし

(123)

かいむき



築山快夢起

つきやま

雅号快夢起は小生がホノルル市内のカイムキ区に寝起した三十年がなつかしく、その上小生理想の健康体である毎夜快よい夢を見て起るに合致しているので、今から二十年前に移ったマノアに住んでも、尚このお題目がなつかしく、そのまま柳名として用いている次第、お相手によって快夢起の方がやさしく通用されているから嬉しい。

まぼろしは追わず明日へレール敷く
 まぼろしの兵士は雪の夜戻る
 今はもうまぼろしとなるきのこ雲
 まぼろしの見えない町へ逃げてくる
 ふりむいてまたまぼろしに笑われる
 まぼろしの母は美人と教えられ

好郎 鬼遊 葛城 天笑 天笑 鬼遊 小松園

川柳塔社常任理事会(四月四日)

議題は句集と川柳大会にしばられた。大会は薫風氏、句集は一三夫が精力的な活動をつづけている。

句集はアイウエオ順に発表することに決まったものの、原稿が全部揃わないと編集に手をつけられない。一人でも多くご参加を願いたいのでギリギリまで待つことにしたが、万一、発行がおくれたり、出来上がりが悪いと、これは云いわけにはならない。とにかく大会や句集を成功させるためにはみなさんのお力を借していただかねばならない。

前号は表紙がぶざまな顔で(雑誌の表紙は顔である)新印刷所からデビューした。原稿のおそかった編集部にも一端の責任がある。四月のストでなんらかのかたちで雑誌発行に支障をきたすだろうが、それらを最小限度に食いとめるべく編集部は努力している。

出席―水客・古方・柳志・文秋・いわえ・薫風・栗・小松園・一三夫諸氏。

▼かならず原稿用紙にペン書きで文字は楷書。締切毎月末着便まで。21行以内。書式は発表誌のように下三マスに雅号。

吉永川柳社（岡山県） 平井三与子報

喜寿近き身をふり返る雪の夜
土手を下り川辺に手折るねこ柳
人情が紙よりうすい冬木立
半分にわけて小さい方を呉れてやり
せめてもと親子の願ひ二流粧
週末の夜を催促する化粧
ありがとう倅せ小さい掌にこぼれ
柳の芽あひるが土手を越えて来る
宣伝は季節はずれのものばかり
二兎を追う男の欲がからみ合い
二の舞を二枚の舌でしてやられ
うそのままですんでその場はほっとする
するめいか生きていのように火に動き
移る世に戸まどいなが春を待つ
友情の重みに催促あきらめる
催促の出来ぬ仏がほっとかれ
二本目の催促目と目が合うだけ
腹芸の幕二次会でまだ降りず
定年も退職金もない職に生き
決壊の土手が政治を嘲笑う

草二
輝生
飴坊
純
武夫
惠美子
胡風
栄
久米雄
清春
伊野
淨美
芳月
三与子
正州
宗義
一声
秋月

オーエスケー川柳会
大坂 形水報

気心知れた仲なれどエツチネ
 ハイキングの弁当からのデイトなり
 ランドセルいつもの路を駈けている
 駈足をするど野良犬ついてくる
 駈足で追っかけて来る物価高
 気心知れた相手をまた待たせ
 思いやり一ぱい詰まっていた弁当
 書留にしたが通じぬラブレター
 新婚の弁当時々ネタがきれ
 電話あるのに書留にする律義
 書留が額の上で躍っている
 気心が知れてラーメンだけにする
 気心が分りすぎて嘘がばれ
 弁当を残さ残さぬ子にある育ち
 弁当を持たずに京の花の下
 書留の封切る間さえもどかしく
 川柳ささやま
 河原みのるの報
 進みゆく齡をかくして紅をひく
 仲人より先に二人は進んでた
 一人娘へ今年も暦無駄にする
 先さまと暦見ながら日を定め
 暦みてまた決心を鈍らせる
 三重九母の帰宅を待つ長さ
 世話馴れて固いはなしも丸めとく
 黒棹のなか丸顔の笑みしずか
 丸めてる手紙に恋の字がのぞき
 ○ペケの試験も裏目ばかり出る
 日の丸を出すは明治と決めている
 アパートの壁に気がねをして暮らし
 何気ない一ト言出戻りようこたえ
 川上元二
 幸太郎
 博泉
 健坊
 亜成
 泉水
 常夢
 聖地
 神田
 一扇
 弥生
 弥生
 入仙
 好郎
 喜美代
 千代子
 可住
 近江
 素水
 掬水
 青峰
 青峰
 れい子
 ひか平
 枝葉
 とおる
 みのる

佳句地10選
(前月号から)

选水圭辻

作られた笑顔心の奥が冷え
口あけて笑える友へ氣を許し
水引を掛けると綺麗な金に見え
満足を知らぬ愚かさ人の性
顔色が変わり冗談ひっこめる
ちよっぴりとふれた自慢で足がつき
ゆきずりの親切な人先きに立ち
かねの価値解らん児へもポチ袋
女とは溢れる涙もつ運命
目立たない妻の支えに花が咲き

八重松風小松園綾女
柳宏子富子とんぼ

逆コース行けばたしかにもうけた
老の坂下りコースが短か過ぎ
手探りで行く人生の我がコース

川柳大阪

兎島与呂志報

良家でもないのに娘箱に入れ
買ひ占め先ず銀行のさがし
買ひ占めの裏に商社の黒い影
買ひ占めへ古女房は顔が利き
禁煙の努力も病氣なおるまで
水煮きの湯気なつかしむ冬の夜
本当の悩み話せば妻笑ひ
表面は笑つてはるが肚知れず
わが夫を信じて今朝の靴磨く
綱を持つ夫を信じて海女の呼吸
革命を信じる瞳が美しい
試運転の調子が氣になる設計図

普風
東々
喜醉
香歩利
武松
季贊
三十四
本蔭椿
徹舟
敏
六竜子

名調子孤独忘れた敬老会道子
調子良い言葉真に受けヒモが付き漁人
努力した栄光の座が温かい重人
スタンブのインクも嬉し荷が居き胡蝶
胎調の躍動母の日も近く洛醉
見透してる親の意見が気にかかり与呂志

堺・若芽合同川柳会

吉岡青香報

一枚の紙で散った若き雄駒子
一片の辞令で人間飛ばされる静馬
白紙委任女ごときに踊らされ宏子
広い夜空にノの字を書く流れ星誓二
孤児の脊に冷めたく星が降り柳影
罪ひとつとつが星になってゆく天笑
とおい日の星座をさがす木馬の目夢成
親として叶えてやれぬ子の願儀一
人権へお願い役所の及び腰左久良
根っからの商売人と云う笑顔柳信
寝姿をのぞけば孫が笑つてた祥月
先ず医者が笑顔になって峠越す青香
笑顔で女が隠す手でおさえ摩太郎
合格の笑顔が浮ぶ電話口千万子
商売とは違う笑顔で来て座り徳子
常連を笑顔でこなす夜の蝶笑痴
老いてなお女笑顔を絶やすまい清女
ドラマまだつづき笑顔で送られる小松園

「菜の花」句会

大路美幸報

責任のないのが強いことを言う鬼遊
移り香を抱かぬ男がにくめない雀踊子
ハイジャックの度胸に国が大慌て綾女
素肌もうやつれた母の背を洗う美幸

パンダもう静かに寝たいだけの夜凡路
よい時の親類だけで目をそらす美代
花嫁の方がシャンとした度胸眉水
待遇を受けてパンダ居ずらそう鶴声
素肌よし若葉の風にそまりそう菜
お茶たてて心も移す娘のしぐさ喜風
責任をいとはど月給くれもせず十止庵
親類の秀才づらと較べられ幸生
ハーケンを石の素肌に打つ若さ酔々
気がついて恥らう思いの口移し誓二
公害の遺児の涙を誰が拭く夕花
どんと胸叩いたまでが責任だった凡九郎
素肌から女が匂う健康美肖二
責任の所在議長もめている三十四
鞘払う古刀の素肌に悟るもの太茂津
弱くとも又別母という度胸頂留子
川柳たけはら森井菩居報

一分間の柳論

天王寺鉄道管理局管内に川柳会「あべの」
が発足して二十五周年を迎えた。一月二十日
に記念川柳大会を開催したところであるが、
毎月の例会には常連七・八名で細々つないで
いる始末、私も最初からの常連で現在会長の
大役をつとめている。会員は国鉄のありとあ
らゆる職種が入り乱れここでは管理者と組合
員一致団結しての「あべの」家族である。更
に大家族にしようとな力を入れている。酒のま
る人もいり。

宮口笛生

番傘・ふあうすと・川柳塔社・と柳社を問
わす互いに頑張っている。例会によく川柳の
あり方について話合いに熱を入れることもあ
る。
雑詠に職場川柳を奨励している。それでい
いのだと思っている。課題吟の課題には頭を
痛めている。今迄何十回となく作句した課題
は極力避けているが、何処かで見たような
句も繰返しているかも知れない。命ある句は
なかなか生れてこないものである。一年に一
句なりととも頑張っている次第です。

患者食二人で食べて満ちたりる静水
父ちゃんのおがほのかに匂う百合房子
ばあちゃんの見舞は孫を見せてあげ静雨
トラ年の子供が欲しいのは主人浄美
ハタリも少しは混ざっている自信蘭幸
スキーの帰郷へ寄ると言う便りスミ子
灯を消してから明日のプランを練り直す季賛
粉雪の優雅に冬を舞いおさめ千百合
しずまらぬ心へ振子の音ばかり政己
冬の川擦ればキンと鳴りそう不朽
枕辺の振子は遠き日をかぞえ紫光
蛙なら冬眠と言う手もあつて青居
のりちゃんのかざだといつてあそんで愛
共稼ぎ心に余裕欲しい日々そのみ
若返る一つに派手な柄を買いかつ子
人見知りする外孫へ汗をかき英詩
共白髪妻に白髪が見あたらず

時計巻く妻よ明日は日曜日
停年へ新しい春かみしめる
脇役の息の長さが羨まれ
子を抱いて女ゆとりをとりもどし

南海電鉄川柳会(大阪府) 辻圭水報

省力化機械はだまっとうどん出し
修理部に省力化は何時のこと
省力化永年勤め邪魔にされ
省力化された時代でひまがなく
省力化無人踏切一つ増え
省力化物を云わない人にする
省力化させた機械に手を噛まれ
省力化出来る余裕を見付け出し

高知川柳社 川竹松風報

公害に美観の花も消えてゆく
草花が一番に咲き春を告げ
儲け高追うて春花の香も忘れ
花活けて来客を待つ春の午後
吟行の足早春の梅に寄り
喘息は季節や花粉にさいなまれ
午後から退社で三度目の見合
午後晴れるつもりで競輪煙火鳴る
午睡から覚めて女をとり戻し
お茶お花通う姿がひまに見え
徳がありひまがあり頼られる
金の要ることをひま人思いつき
病人に妻奪われた留守世帯
右の乳飲む左も手で奪い
終戦の奪い合いたる芋がゆよ
兄弟で奪い合うから二つ買う
さき酔うた方に発言奪われる

屋上で見下すひとが憎くなる
叱るパパ慰むママで子は育ち
苦勞した皺が面影消して行く
親の顔薄れ施設の児は育ち

大阪川柳会 金井文秋報

面影を浮かべつて書く年賀状
丁寧な言葉も添えて出す寸志
寸志からこぼれる誠意受止める
開けて見てなるほど寸志と書いてある
芸術と云う名で脱がす手もつかい
駄々こねる子役に幕がまだ開かず
切るよりも気骨の折れる切られ役
悪役で売れ年ごろを持つ悩み
配役も屋号が物を云う歌舞伎
父親の役も演じて寡婦生きる
コート手に寝すぎた朝の霜を蹴る
麗人が着れば絵になる雨ゴート
ミンクのコート心そんなに寒いんか
派手すぎる衣裳コートの裾に見え
テニスコートで恋を得られた皇太子
朝の値をもう書き替えている恐怖
おびえる心押える深呼吸吸
瘦せ細る万円札におびえる日

和歌山七面句会 中筋三幸報

寝不足のせいにしている肌の荒れ
双子にも黒字は別なところにある
左から右に黒字を変えてみる
いい加減にしたらと妻の愚痴で飲み
孫と風呂にキッスの肌ざわり
黒子一つ風雪に堪えた顔の皺
湯加減を尋ねてくれる嫁が来て

色彩画入り

古方手書き句集

送料共 八百円

味加減のれんの重み伝えて来
たくあん(の)重石の加減を嫁が継ぎ
肌の色違う子供と二人住み
コメディアン黒子をとると怖い顔

城北明朗句会

川口弘生報

一万円の賽銭投げるとこは見ず
一線を引いて女の膝固し
いと簡単に小切手に書く零の数
命あり初日おがめる有難さ
見合い写真衣裳をはめて返って来
胃袋の調子で包丁はめられる
キャバレーで意外の人と顔が逢い
門松や松竹梅も絵でかざり
正月を逃避の組と成りにけり
民宿は地玉子だけを自慢する
ビタミン葉ただなんとなくなるとなく

ウイロー社(ハワイ)

林蒼蛇楼報

大吉のおみくじ出るまで引いて見る
盛衰は此の世の運だ腹をすえ
幸運は追えば逃げるし待てば来ず
幸運が却って其の身の仇となり
一便を遅れて惨事に遠くいる
まごついた企画へ運は逃げまわり
初詣で鈴で開運たのんで来
法網をくぐって悪運まだつきず

始末書をまた繰返しにける若さ
 矢傷背に花は素しらぬ顔で生き
 弓も矢も折れ東京を發つ夜汽車
 花ぐもり茶店の番茶香りなし
 寝るだけの休日ちやうど花ぐもり
 矢継早に便乗組もある値上げ
 人類の明日へゆっくり花ぐもり
 散々に矢を射つくして他へ嫁かれ
 寝入はな矢庭に變な声出され
 一矢報いてしりが一つふえ
 傘だれた母は離さぬ花曇り
 放たれた矢に終着の的がない
 煮え切らぬ女を連れて花曇り
 矢的のになつて社長の射を待ち
 キューピットまたはずれ矢を俺にくれ

弥生 鬼遊 二三 薰保 一步 岳人 痴亭 儀江 喜風 修史 小松園 茂男 水陵

くり返し出して、も息子の返事来ず。凡
矢面に立つて弱者のかたを持ち。生
弓と矢をだけ飾つての五月晴。重
川柳東大阪（大会抜） 竹中肖二報
ありがとうの一言妻へ云い出せず。牧
人生譜一直線に画くヤング。酔々
山男全身ヤングという闊志。岳人
線香の煙りヤングは煙むたがり。い
アルバイト今日の仕事がまた変り。肖
アルバイト学費に困る訳でなし。柳
卒論はこれで書く気のアルバイト。お
学校へたまた顔出るアルバイト。つ
はのぼと妻の手をとる叙熱の日。多
小包の母の手縫いの暖かさ。弘
はのぼと心安らぐ我が家の灯。思

(124)

く
に
ひ
ろ



門休半弘玉

た。「門」は路郎師在世中は付けないことにしていたが、その後地元先の輩から「半休は小男で踏張りがつかん。門構えでどつしりとせよ。」と云うことで半休門としたが生来の小兵は社長タイプともゆかず、齡六十八歳にして、人生二周目の旅行業にあくせくしています。

週休二日制が完全実施されると（土）（日）が忙しい不肖の仕事は御約束通り十二時間働くことになり、好きな句会も欠席が多い。

(下関市・旅行業・六十八歳)

本社五月句会

日時 五月七日(火) 午後六時
会場 以和貴荘(いわきそう)

阿倍野区松崎町二丁目
電話 622・1275番

兼題

柳話

「響き」
「めし」
「手腕」
「分身」

席題 三題 当日発表
会費 二百円

★投句だけの方は切手50円封入

菊 沢 小松園
(今月の出題・河内天竺)
香 川 酔 々 選
西 木 い わ 選
八 村 摩 天 郎 選
川 好 郎 選

各題三句以内厳守

★電話での投句や訂正はご遠慮願います
大阪市南区鰻谷仲之町20

川 柳 塔 社

6月の兼題 「快心」 「合の手」
「波止場」 「雨だれ」

募集

七月号発表(5月15日締切)

川柳塔(10句) 中島 生々庵 選
水煙抄(10句) 川村 好郎 選
課題吟(各題5句以内)

「宵宮」 和 海 草 春 選
「独立」 若 林 草 右 選
「盆」 川 竹 松 風 選

★原稿は四百字詰原稿用紙に四枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

八月号発表(6月15日締切)

川柳塔(10句) 中島 生々庵 選
水煙抄(10句) 川村 好郎 選
課題吟(各題5句以内)

「夏枯れ」 木 村 一 路 選
「風鈴」 光 好 陽 子 選
「避暑」 出 原 真 奇 選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。
★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

7月7日は句集刊行と川柳大会

松坂屋の商品券

ご利用がさらに便利になりました
大丸各店にも共通

松坂屋―名古屋・上野・銀座・静岡・大阪・岡崎・
東京大手町ビル売店・横浜野沢屋
大丸―(大阪・東京・京都・神戸・町田・八王子)
和歌山大丸・博多大丸・下関大丸
高知大丸・鳥取大丸・別子大丸
500円券から30000円券
まで8種類



大阪天満橋
松坂屋
電 (06) 943-1111

定価 二百五十円(送料十六円)

半年分 千五百五十円(送料共)
一年分 三千円(送料共)

昭和四十九年四月二十五日印刷
昭和四十九年五月一日発行

大阪市南区鰻谷仲之町二〇番地

編集者 中島 蓬太郎
発行人 藤原 童心 社
印刷所 藤原 童心 社

郵便番号 542

大阪市南区鰻谷仲之町二〇番地

発行所 川柳塔 社

電話 大阪・二七一・三九八五番
振替口座 大阪・三三三八番

・ペンペン草・

★毎年五月になると、故豆秋さんをおもいたす。やっぱりこの人は、永遠に、川柳人の胸に生きていくのであろう。

★今東光先生主宰の「大阪文化」誌へ、豆秋さんが亡くなって一、二年後に四枚ばかり書いたことがある。東光大僧正は川柳きらいだったか（しかし路郎先生だけは詩人として好きだった）一流の随筆家たちと肩をならべて活字にしていた。昨年はある新聞の読

切り小説特集にも書いた。拙文だが、豆秋さんは文章になる人だった。

★なんとも書くことだが、豆秋さんは昭和三十六年五月四日午前五時になくなった。そして恋女房のとらさんへのこした遺言状が豆秋さんでないと書けないものであった。

★告別式は翌五日、この日の「祭日」だった。各戸にへんぽんと日の丸の旗がひるがえり、空は抜けるように青かった。この風かおる街のなかを豆秋さんの霊柩車が走る。この人らしいお葬式である。

★一日の丸の旗の中での葬式やなんて豆秋さんらしい。

▼葉子コーナー

▼五月は一番好きな月。雪どけの小山へ福寿草を子供の頃よく取りに行きました。チョッと顔を出しているだけですが、枯葉をかき分けると五厘位になっていきます。私のように細いのは可愛らしいがなく、コロコロ太っているのを掘って帰ります。丈夫で長持ちの方がよろしいですものネ。

ナ」と、今は亡き木村十哲さんが云う。「ほんまやナ、豆秋さんご機嫌やで」とは伊達腰子さんだ。十哲さんも腰子さんも豆秋さんに指導を受けていた人たちである。豆秋さんという人は「先生」と呼ばせないようなムードで指導していたのである。「川柳・阿倍野支部」(南大阪川柳会の前身)の支部長は、菊沢小松園氏か、須崎豆秋氏か、ハッキリしていなかった。暑中見舞いや年賀広告の時期になるとちよいちよい編集部は泣かされたものである。

★豆秋さんのお宅は四畳半と三畳ほどの二た部屋で平家だった。そんな家に向い合っているハモニカ長屋の端っこ空地で、紋服姿の霞乃先生を中心に前記の十哲、腰子、ぼくたちが出棺を待っていたのである。ここ旭町は新世界にも、飛田(川遊廊)にも近く、夜が楽しい町である。「とうとう阿倍野支部の変人もあいの世へ行かしたか」と十哲さんがぼつり云う。「変人なら阿倍野支部にはコト欠かんわ」と腰子さんが受ける。「そや、腰子という

変人がピンピンしとるからナ」と十哲さん。「なに云うてんね、変人なら十哲には負けるわい」イヤお前は変人の本家や。お前こそ変人の元祖や、と栗おこし屋のような本家、元祖までとび出した。腰子さんは自営のアパート代を五、六百円程度で貸し、値上げを絶対にせぬという変り者だし、十哲さんときたら十七歳とかで女を知り、死ぬまわまで五十数年間、一日として

「休んだことのない」のが自慢の人だった。たしかに変わり者ぞろいである。

★この変人論争はなかなか決着がつかず、ついにぼくが中へ割ってはいり、まああと両手をひろげたまではよかったが、「なんやホンモノの変人が仲良しにはいりや」と、十哲、腰子さんがホコ先きをガゼンぼくに向けてきた。

★常識人をもって自認するぼくに、これはまたなんという暴言だ、と、話はいよいよややこしくなり、ついに終始ニコニコしながら聞いておられた霞乃先生に、「さか」の中で誰が一番変人ですか」と、おうかがいをた

「でることになった。

★霞乃先生は、このアマらしいドテツもない変人論争にあきれておられたが三人の顔を等分に見ながら「そやね、変人というたら不二田さんに勝つ人はおらんやろね」とおっしゃった。

★この判決には、ほくたる者アゼンとならざるを得なかった。しかし、誰よりも尊敬している霞乃先生の判決だから控訴はしなかったけれど――。

★あの日から十三年、今たにあの時の霞乃先生の「おめがねちがよい」を不思議におもっている。

★豆秋さんの告別式の日のことだが、変人論争とダブって話が二つに割れてしまった。だが、たいたい創作する人は大なり小なり変人が多いようにおもっている。ぼくなど、いうなれば病い軽症に属するほうだと思っていけるけれど、他人様から見れば、とうとうつるのか、まあ気にしないようにしておこう。

★同人句集は予想以上のご参加がありスタッフ一同ハりきっている。七月七日を成功させたため蕨風大会委員長も大わらわというところ。(不二田「三丈

疲労回復・肩こり・神経痛に

アリナミンA

含さちみり糖・ほかにちみり糖

☆食後すぐの効果が効果的

☆くわしくは医師や薬局・薬店で



タケダ

第

